

狭山の石仏



元禄四年庚申二月小笠原村高尾野郷
始原村同行寺僧人

奉造五等菩薩
共慶三十五



草 吉野 弘

人さまさまの

願いを

何度でも

聞き届けて下さる

地蔵の傍に

今年も

種子をこぼそう

目次

① 生産神	3~12
② 塞ぎ	13~18
③ 現当二世安楽の供養塔	19~55
④ 経典供養塔	57~74
⑤ 巡拝供養塔	75~80
⑥ その他の石仏	81~86

種子と真言について 87

印相について 88・89

「偽」について 90

石仏地図・地区別索引

入間川地区 92

入間地区 94

堀兼地区 96

奥富地区 98

柏原地区 100

水富地区 102

あとがき 104

凡例

1. 本書は、平成11年5月22日より6月20日までを会期として狭山市立博物館が主催した企画展「写真展 狭山の石仏'99」の研究成果をもとに作成したものである。
2. 掲載石仏のうち、下奥富の広福寺内の石仏は(本文68P,74P)今回の調査で所在を確認できなかった。しかし、貴重な石仏であり、石仏の保存のあり方に警鐘を鳴らす意味で、『狭山市史民俗編』(昭和60年発行)掲載の写真を使用した。
3. 本書の本文執筆は、高橋光昭氏(狭山市企画総務部副参事・前博物館長)が石仏撮影は狭山市立博物館職員が担当した。

生産神

生産神とは、農業に従事する人々にとってはさくかみ作神であり、商工業を営む者にとっては商売繁盛の福神のことです。また、人間の誕生、すなわち子孫繁栄をもたらす性神もこの中に入れることができます。

狭山市は、かつては農業が産業の中心であったので、生活や信仰の中心もそこに向けられ、石仏も農作物の豊作をもたらす作神として、べんざいてん弁財天・くずりゆうだいごんげん九頭龍大権現などの水神、ふじさん富士山・おみやま大山・でわ出羽三山などのれいざん霊山信仰碑、ひまち日待・つきまち月待の供養塔が多くみられます。

1 弁財天

べんざいてん

所在地 上赤坂

サイズ

高さ150cm

幅54cm

台座高さ17cm

台座幅69cm

(給食センター近くの堀兼境)



船は新河岸川を行き来する宝船とみることもできます。また、この付近一帯は、かつては大雨が降るとしばしば洪水になった場所なので、この弁財天は作物を水害から守るといって性格を合わせ持っていたともいえます。それは、「二世安楽」の文字が刻まれていることからわかります。

稲の養い水を与えてくれる水神のうち、もっとも知られているのは弁財天です。この弁財天は上赤坂にあり、元禄13年(1700)に造立されたものです。

頭に鳥居を戴き、右手に宝剣(現在は欠けてない)、左手に宝珠を持つ姿に造られたこの弁財天は、台座には波を切って走る帆掛け船が刻まれ、道しるべも兼ねています。

この石仏は、江戸への舟運があった新河岸へ通じる道沿いにあるので、帆掛け

伝説を伴う石仏

【穴あき石】(入間川)

入間川の徳林寺の境内にたつ成円地蔵さんは、たいへん霊験あらたかだといわれています。耳の病の人が地蔵さんに願をかけ無事願がかない、そのお礼にと入間川から穴のあいた石をひろってきて糸を通しておさめました。これは耳がとおったとか、いろいろな願いごとが通じたとするしだといわれています。

(写真25)



伝説を伴う石仏

【田中のカンカン地蔵さん】(入間川)

田中の墓地の片すみにあります地蔵さんは「カンカン地蔵さん」と呼ばれています。たいへんにご利益があるといわれ、病気で苦しむ人の願かけがあとをたちません。腹が痛くてこまっているときは、米を供え、小石で地蔵さんの腹をたたくとたちまち治るといわれます。そのため多くの人が祈願をするときカンカンたたくので頭・眼・口・鼻・耳・手・腹…といたところが欠けくぼんで穴だらけになっています。

(写真28)



2

九頭龍大権現

くずりゆうだいこんげん

所在地
サイズ下奥富(前田集落の堤防下)
高さ82cm 幅44cm

この石塔は入間川の堤防に沿った下奥富いるまがわに祀られており、嘉永3年(1850)12月に造立されたものです。

九頭龍とは、洪水のときの河川の荒れ狂う様子を九頭の龍の姿に見立てたものと考えられ、ここに九頭龍大権現を祀ったのは入間川の水の猛威しずを鎮め、田畑を洪水から守ることを祈って建てられたと考えられます。

なお、九頭龍信仰のものは、長野県の戸隠神社奥社の九頭龍大権現と考えられ、古く

から豊作をもたらす神として信じられてきました。

3 富士信仰碑

所在地
サイズ青柳(氷川神社内)
高さ171cm 幅77cm
台座高さ33cm 台座幅180cm

秀麗な姿をした富士山は、古くから霊山として信仰されてきました。とくに江戸時代後期から明治時代になると、各地に同信者の集団である講こうが結成され、富士山に見立てた富士塚や講碑が建てられました。

この石碑は青柳の氷川神社境内にあるもので、明治10年(1877)8月の造立です。表面を平らに削った自然石ふじたけに「富士嶽神社」と刻み、その上部には瑞雲ずいうんを伴った日月があります。

裏面には「村内五穀豊登ほうと」の文字があるので、五穀豊饒を祈願する作神的要素が強い石碑といえます。

なお、富士信仰碑は、江戸時代には「富士浅間宮せげんぐう」や「富士仙元大菩薩せんげんだいぼさつ」などと刻むものが多く、明治初年の神仏分離以後は「富士嶽神社」「浅間大神」などと刻まれています。

4 おおやま 大山灯籠

所在地
サイズ
柏原(本宿バス停付近)
高さ191cm 幅73cm



神奈川県のおおよそ中央にある大山は、富士山と同様に古くから霊山として信仰されてきました。

この山には阿夫利神社あぶりが祀られていますまつが、同社は江戸時代には石尊大権現せきそんたいごんげんと称され、各地に講が作られました。その理由は、大山の別名が雨降山あふりさんと呼ばれたように、雨を降らす神としての信仰が、農耕社会の発展とともに農民に受け入れられたためと考えられています。

この石灯籠とうろうは柏原したじまの下宿くにあり、文政13年(1830)6月に同地の恵花組えげによって造立されたもので、竿さおの部分に「奉納石尊大権現」と刻まれております。

この灯籠は、稲の仕付けに先立って講員の代表が大山に参詣さんぎ(代参だいさんという)し、その帰りを待って一定の期間点灯されたと考えられています。

5 出羽三山供養塔 でわさんざん

所在地
サイズ
南入曾(金剛院内)
高さ88.5cm 幅37cm
台座高さ26.5cm 台座幅43cm



出羽三山とは、山形県の中央部にそびえる月山がっさん・羽黒山はぐろさん・湯殿山ゆどのさんのことで、江戸時代後期になると各地で供養塔が造立されるようになりました。

三山のうち、農民すうはいの崇拜がもっとも厚かったのは湯殿山です。それは、湯殿山神社の御神体である巨岩から噴き出す霊湯が、五穀豊饒に靈験があるとされたためです。

南入曾なんごういんの金剛院境内にあるこの供養塔は、文政11年(1828)2月に建てられたもので

す。正面に胎藏界大日を表す種子「アーンク」が刻まれ、湯殿山を中心に向かって右に羽黒山、左に月山と彫られています。

6 日待供養塔

ひまち

所在地

南入曾(金剛院内)

サイズ
高さ 81 cm 幅 34 cm
台座高さ 21 cm 台座幅 43 cm



日待とは、近隣の同信者がある特定の日に集まり、一夜を眠らないで籠もり明かし、日の出を待って太陽を拝むことをいいます。また「待」は、祭りとする説がありますが、その最初の意味は「おそばに居ること」、つまり、神とともに夜を明かすことにあったといわれています。

この供養塔は、南入曾こんごういんの金剛院境内にあります。主尊の地藏菩薩は、尊顔をはじめ主要部分がかなり欠け落ちています。尊像

の向かって右側に「奉造立日待供養」と刻まれています。元禄6年(1693)11月に建てられたこの石塔には、栗原弥左衛門ほか7人の同信者が施主として彫られています。

7 月待供養塔

つきまち

所在地

柏原(長源寺内)

サイズ
高さ 143 cm 幅 36 cm
台座高さ 28 cm 台座幅 60 cm



月待とは、同信者が十五夜・二十三夜など特定の月齢げつれいの夜に集まり、月の出を待ってこれを拝むことをいいます。

太陽と月は古代から信仰の対象でしたが、江戸時代になると、本来のお籠もりの姿は共同飲食の場へと変わり、農村ではこれに作神信仰さくがみの要素も加わりました。

この供養塔は、柏原ちようげんじの長源寺境内にあるもので、瑞雲を伴った月の下に大きく「二十三夜塔」とあり、天保7年(1836)4月に造立さ

れたものです。下部に「徳大勢至菩薩とくだいせいし ぼさつ」と刻まれています。勢至菩薩は智を表す仏で二十三夜の本尊です。

8 蚕かいこ 神がみ



所在地
サイズ

下奥富(亀井神社内)
高さ66cm 幅24cm
台座高さ8cm 台座幅41cm

狭山市を含む埼玉県西部地域は、かつては養蚕が盛んに行われていました。蚕の飼育は大変な仕事でしたが、比較的短期間で繭まゆの出荷ができたので、農家にとっては大切な現金収入源だったのです。

この蚕神は下奥富かみいの亀井神社境内にあり、文政13年(1830)に造られたものです。家屋形の石祠には「蚕影山大権現」と刻まれ、左側面には「願主講中」とあります。

ここでいう講中とは、養蚕が主に女性の手

で行われていたことを考えると、女性を中心とした「オシラ講」ではないかと思われます。

なお、蚕影山は茨城県つくば市所在の蚕影神社のことで、古くから養蚕の神として信仰されてきました。

塞ふせぎ

市内に残る石仏は、道路の拡幅や改修などにより、寺院や神社に移転したものが多くみられますが、それでもなお、かつての村境や道の辻、橋のもとなどに祀まつられているのを見ることができます。

こうした場所に石仏が建てられたのは、村の安穏あんのんを妨あへげる悪疫や農作物の豊かな実りに害を及ぼす病虫害などが、村の中に入らないようにするため、これを「塞ふせぎ」といいます。

石仏としての塞ふせぎは、道祖神が広く知られていますが、市内にはありません。その理由は定かではありませんが、庚申塔こうしんとうなどがその役を担っていたためと思われます。

したがってここでは、有縁無縁うゑんむゑんの三界万霊供養塔さんかいばんれいこうとうや石橋供養塔いしばしこうとうなどについて、みていくことにします。

9 さんがいぼんれい
三界万霊供養塔

所在地
北入曽(常泉寺墓地)
高さ 126 cm
幅 35 cm
台座高さ 23 cm
台座幅 58 cm



「三界」とは、仏教の世界観しゆじょうで衆生しゆじょうが生まれてから死りなに輪廻する領域としての三つの世界、つまり欲界よくかい(淫欲と貪欲の世界)・色界しきかい(淫欲と貪欲を離れた生き物の住む世界)・無色界むしきかい(物質を超越した精神のみが存在する世界)をさします。また「万霊」とは、この世における一切の霊のことをいいます。

この三界万霊供養塔は、北入曽きたいりその常泉寺じょうせんじ墓地きぼちにあり、元禄3年(1690)に造立されたものです。石幢せきとうと呼ばれる六角柱の塔に地蔵

菩薩ぼさつが刻まれ、「有縁無縁」うえん むえん「法界万霊」ほっかいなどの文字が彫られています。

この供養塔は、寺院の門前や墓地に建てられていますが、その理由は、そこが多くの人から回向えこうを受けやすい場所だったからと考えられています。

なお、この供養塔には、「三界万霊等」「三界万霊有縁無縁」「無縁法界万霊」などと刻むものもあります。

伝説を伴う石仏
【黒くなった地蔵さん】
(入間川)

入間川の慈眼寺のうら手にあります地蔵さんを「いぼ地蔵」とか「黒地蔵」とかいいます。いぼで苦しんでいる人が地蔵さんにあがっている線香の灰をもって帰り、いぼにぬりつけると治るといわれ、これが評判になり線香をあげる人が多くなりました。その煙にいぶされて地蔵さんが黒くなったということです。(写真27)



伝説を伴う石仏
【化け地蔵さん】(入間)

下水野の辻にたつ地蔵さんは、子どもの夜泣きをしずめることで有名です。願をかけるときには荒なわで地蔵さんをしばり、成就するとほごきます。

地蔵さんのたつあたりは、ケヤキと竹林が生い茂り、昼でも暗いところにポツとたつ地蔵さんはまるで何かむしきかいが化けたように見えたといわれ「化け地蔵さん」の名がつけられたということです。(写真24)



10 石橋供養塔

いしばし

所在地
サイズ

加佐志(共同墓地)
高さ 117 cm
幅 22 cm
台座高さ 44 cm
台座幅 28 cm



川にかかる橋は、人々の往来に欠くことのできない大切なものでした。ことに、江戸時代になって馬などによる物資の運搬が盛んになると、その重要性はますます増えました。

しかしながら、当時の人々は悪霊や病気などの悪疫・病害虫なども、道や橋を通して村内に入ってくると考えていました。

この石橋供養塔は、加佐志の共同墓地にあり、安永10年(1781)に建てられたもの

です。丸彫りの地蔵菩薩を主尊とし、台座に「石橋供養」とあります。

11 石橋供養塔

いしばし

所在地
サイズ

入間川2(管1自治会館脇)
高さ 87 cm
幅 36 cm
台座高さ 34 cm
台座幅 71 cm



この石橋供養塔は、入間川2丁目の菅一自治会館前にあり、安永10年(1781)の造立です。正面上部に浮き彫りの馬頭観音を刻み、その下に「石橋供養塔」とあります。

この時代、橋をかけるには大変な資金と労力を必要としました。それにもかかわらず、こうした供養塔を建てたのは、村の安穏を祈ると同時に、仏教でいう「作善」、つまり善を施すことが、仏の道に適うと考えられていたためです。

12 敷石供養塔

しきいし

所在地
サイズ

南入曾(金剛院内)
高さ71cm
幅30.5cm
台座高さ20cm
台座幅50cm

敷石供養塔は、寺院や神社の敷石が完成した際に造立されました。

この敷石供養塔は、南入曾の金剛院境内みなみいりぞう こんごういんにあり、天保3年(1832)に造られたものです。石塔には、しょうや じよりやく「庄屋水野忠助」「助力近村中」とあるので、水野村と近隣の村々が協力して敷石を完成させ、供養塔を造立したことがわかります。また台座には、発願として僧侶や村人の名前があり、助力として念仏講中ねんぶつや齋日講中さいにちの人々の名前も刻まれています。

す。

敷石も石橋をかけるのと同様に、多大な経費と人手を必要としました。これに多くの人々がかかわっているのは、労力を提供することが功德くどくであり、ひいては村を悪霊から守ることにつながると考えていたためです。

現当二世安楽 の 供養塔

げんとうにせいあんらく
「現当二世安楽」とは、「この世とあの世」の二世にわたり、幸せに暮らせることを願うことです。

市内の石仏をみると、この文字を刻むものがたくさんあります。それは、農民をはじめとする多くの庶民が、取り返しのつかない過去の世はともあれ、この世にあって善を施すことにより、あの世での幸せを願うという純朴な信仰心が、造立供養に結びついていったためと考えられます。

そのため、この供養塔は地蔵菩薩じぞうぼさつをはじめ、馬頭観音ばとうかんのん・如来などのさまざまな仏像が、自分たちの日常生活とのかかわりの中で造立されていきました。

なお、庚申信仰は、仏教とは無関係の中国の民間信仰から生まれたものですが、我が国に伝わってからは仏教の現当二世安楽の性格を強く持つに至ったため、ここで取り上げることにしました。

こうしん
庚申塔

庚申塔とは、庚申信仰から生まれたもので、市内では地藏菩薩や馬頭観音に次ぐ38基が造立されています。

○庚申信仰

庚申信仰の源流は、中国の道教にあるといわれています。

庚申信仰とは、人の体内に棲む三尸という虫が、60日ごとに巡ってくる庚申の晩に天に昇り、天帝にその人の罪科を告げて寿命を縮めさせるのを防ぐため、この日は眠らずに一夜を過ごし、三尸が天帝のもとへ行けないようにするという「守庚申」から始まったものです。

庚申信仰に仏教的色彩が強く現れ出したのは室町時代になってからで、このころから阿彌陀如来などの諸仏を礼拝して夜明かしをする「庚申待」が行われるようになりました。

そして江戸時代になると、この信仰は農民層にまで広がり、各地に講が結成されました。彼らは庚申の晩に集まり、眠らぬように努めました。そうした中で交わされる言葉は、最大の関心事である農業や日々の暮らしの行く末についてでありました。その結果、庚申信仰はしだいに現当二世安楽を願う信仰へと姿を変え、互いに金銭を出し合って庚申塔を造立するようになったのです。

○造立の時代的推移

江戸時代に建てられた庚申塔は、その形

態から3期に分けることができます。

第1期は、三猿を主尊のように配した寛文9年(1669)から元禄5年(1692)までです。第2期は、青面金剛を主尊とした元禄6年(1693)から寛政元年(1789)、第3期は、庚申の文字のみを刻む寛政11年(1799)から幕末にかけてです。

次にこれを造立者でみると、第1期は、比較的少人数の、村の長百姓級による造立と思われる時期で、その初期には僧侶と考えられるものがみえ、やがて寺名を刻むものが出てきます。第2期は、惣村中や講中など、多人数による造立の時期です。このころになると、寺名のほかに、指導者的役割を持つ僧侶名を刻むものも現れます。第3期は、個人的色彩の強い造立に特色があり、僧侶名などを刻むものは皆無となります。

最後に地区別にみると、堀兼がもっとも多くて11基、次いで入間の7基、入間川と水富の各4基、柏原の2基となり、奥富にはありません。これをみると、堀兼が突出していますが、同地区では第1期から第2期にかけての造立が主体で、第3期以降はみられません。それとは対照的なのが入間で、第2期から第3期にかけての造立が目立ちます。

○造像上の特徴

市内の庚申塔では、青面金剛を主尊としたものが15基あります。青面金剛は、元来はインドの土俗神でしたが、やがて仏教に取り入れられて守護神化したとされています。

それが庚申信仰の主尊と化したのは、

伝戸病(結核)の加持祈祷の本尊となり、伝戸が三尸に結びついたためといわれ、その姿は1面4臂(4本の手)が1基、1面6臂が14基です。

次に、庚申塔につきものの三猿を刻むものは20基あります。そのうち19基は、「見まい・聞まい・話すまい」の三猿で、残りの1基は三猿が踊っているものです。

三猿を刻む意味は、三尸の害を防ぐには悪事を見たり、聞いたり、話したりしないとの考え方が、本来の庚申とは無縁な三猿と結びついたためとか、庚申は「かのえさる」と読むので、そこから猿が彫られるようになったなどといわれています。

また、庚申塔には鶏を刻むものも多くみられます。鶏を刻む理由は、庚申の日を夜明かしすると酉(鶏)の日になるからとか、鶏は

多産であるためなどといわれていますが、今のところ定説はありません。

によらい
如来

如来とは、悟りの境地に到達した仏のことをいいます。歴史上の存在では、釈迦如来が広く知られていますが、その後、阿彌陀如来や薬師如来・大日如来など、さまざまな如来が考えられるようになりました。

その姿は、頭はいぼいぼの螺髪で、その中央には盛り上がった肉髻があり、眉間にはホクロのような白毫があります。着衣は、衲衣をまとうだけなので、装身具を身につけている菩薩とは容易に区別できます。しかし、大日如来だけは頭に宝冠を戴き、装身具をつけた菩薩形に造られますが、印相(手の組み方)によって区別することができます。

伝説を伴う石仏

【加佐志の耳だれ地藏さん】(堀兼)



むかし、加佐志に「耳だれ地藏さん」と呼ばれるお地藏さんがありました。

むかし、耳の病の人が願かけにくるときは、かならずお酒を入れた、たかづっぽ(竹筒)をぶらさげ「お地藏さん、どうか耳だれをなおしてください、なおしていただければ、このお酒を倍してお礼にまいります」といって一心にお願いして前の人がぶらさげていった、たかづっぽのお酒をもって帰り、ただちに耳につけるとなおるといわれます。お礼にはかならず、たかづっぽを二本にして納めるならわしになっています。

(写真26)

13 庚申塔



所在地
堀兼(堀兼神社)
高さ105cm
幅36.5cm
台座高さ19cm
台座幅60cm

この庚申塔は、堀兼神社境内にあり、寛文9年(1669)に建てられたものです。

この石塔は、山形の上部から中央にかけて「奉供養庚申待結集□」とあり、その下に三猿が刻まれています。造立者は、僧籍と思われる仏心坊をはじめ、中世の土豪層出身と考えられる小沢平左衛門尉ら、11人の名前が彫られています。

14 庚申塔



所在地
堀兼(堀兼神社)
高さ82cm
幅32cm
台座高さ9cm
台座幅36cm

この庚申塔も、堀兼神社境内にあります。これは延宝5年(1677)に造立されたもので、やはり三猿が刻まれています。写真13との違いは、造立者が田中仁左衛門・大野甚右衛門など、「尉」のつかない一般的な名前になっている点にあります。

このことは、単に造立者の名前が変わったというだけでなく、江戸幕府が中世の土豪的な色彩を駆逐し、幕藩体制の基礎を確立したことを物語っています。

15 庚申塔



所在地
サイズ

南入曾(金剛院内)
高さ122cm
幅47.5cm
台座高さ38cm
台座幅77cm

この庚申塔は、南入曾の金剛院境内にあり、青面金剛を主尊とするものです。天明2年(1782)に造立されたこの石塔は4臂の像で、手には三叉鉞・宝輪・宝剣・羅索を持ち、二邪鬼を踏まえ、二童子を従えています。また台座には、四夜叉が配されています。

この石塔の右側面には、5行にわたって銘文が刻まれています。そこには「聖朝安穩 天長地久」「国土安泰 万民豊楽」「衆病悉除 身心安楽」「寿命長遠 恒受快樂」の文字が

みられるので、村人の現当二世安楽を願って建てられたことがわかります。

16 庚申塔



所在地
サイズ

水野(天理教会付近)
高さ152cm
幅42cm
台座高さ33cm
台座幅78cm

この庚申塔は、入曾駅近くの水野にあり、天明2年(1782)に造立されたものです。主尊の青面金剛は6臂像で、三叉鉞・宝輪・弓・矢・宝剣・半裸の女人を手にし、二邪鬼を踏まえ、二童子を従えています。その下には向き合う形で2羽の鶏が、台座には三猿が刻まれています。

この石塔も左側面に、「当処転禍為福」「衆病悉除 身心安楽」の銘文がみられます。写真15の銘文と酷似していますが、その理

由は、いずれも金剛院の寛慶という僧侶の指導によって建てられているためではないかと思われます。

17 庚申塔



所在地
サイズ

上広瀬(富士浅間神社)
高さ106cm 幅40cm
台座高さ66cm 台座幅60cm

この庚申塔は、上広瀬^{かみひろせ}の富士浅間社^{ふじせんげんしゃ}にあり、寛政11年(1799)に造立されたものです。丸彫りの青面金剛は市内ではこれ1基で、6臂には写真16と同じものを手にしています。

台座正面には、右から左に「惣村中」とあり、両側面と裏面には造立にかかわった37名の農民とともに、修験者と思われる正学院の名がみえます。

18 庚申塔



所在地
サイズ

堀兼(堀兼神社内)
高さ139cm 幅64cm
台座高さ36cm 台座幅95cm

この庚申塔は、堀兼神社境内にあり、安永^{あんえい}10年(1781)に造立されたものです。大きな自然石に青面金剛を表す種子「ウン」を刻み、その下に「庚申碑」の文字を彫り込んだこの石塔は、市内でもっとも古い文字塔です。

19 庚申塔



所在地
サイズ

水野(水野郵便局付近)
高さ99cm 幅37cm
台座高さ30.5cm 台座幅55cm

この庚申塔は、水野郵便局付近にあり、元治元年(1864)に建てられた文字塔です。この石塔の特色は、台座正面に御幣・鈴・扇を手にした踊る三猿が刻まれている点で、三番叟に見立てた五穀豊饒の祈りが込められているものと思われます。

なお、台座の右側面には「青梅みち御嶽山道」、左側面には「三ヶ島道山口観音みち」とあるので、道しるべを兼ねていたことがわかります。

20 釈迦如来



所在地
サイズ

入間川2(徳林寺墓地)
高さ150cm 幅36cm
台座高さ20cm 台座幅45.5cm

○釈迦如来

釈迦如来は、一般的には「お釈迦さま」と呼ばれ、多くの人に親しまれている仏教の開祖で、市内には2基あるのが確認されています。

この釈迦如来は、入間川2丁目の徳林寺墓地にあり、宝永6年(1709)に造立されたものです。蓮華座の上に乗る丸彫りの姿は重量感があり、立派なものです。

この石仏は、右手はすべての畏怖を取り

除き、衆生に安心を与える施無畏印を、左手は衆生の願いを施し与える与願印を結んでいるので、多くの人々の現当二世安楽を願って建てられたものであることがわかります。

21

阿弥陀如来

あみだによらい



所在地
サイズ

笹井(宗源寺内)
高さ76cm 幅36cm
台座高さ12cm 台座幅38cm

○阿弥陀如来

阿弥陀如来は、法蔵比丘という人が長い間功德を積み重ねた結果、ついに悟りの境地に到達して仏になったといわれています。

この如来の功德によって極楽往生できるという思想は、平安時代末期から鎌倉時代にかけての政治的混乱や打ち続く戦乱の中で、「南無阿弥陀仏」の名号とともに全国的に広まり、江戸時代になると庶民もこの石仏を造立するようになりました。

この阿弥陀如来は、笹井の宗源寺境内にあり、寛文13年(1673)に建てられたものです。

この石仏は、浮き彫りの立像の上部に「奉造立」と刻み、向かって右に「南無西方極楽世界阿弥陀仏」とあります。台座には、土豪層と思われる水村将監ら10名が願主として刻まれているので、彼らが極楽浄土を願って造立したものであることがわかります。

22

薬師如来

やくしによらい



所在地
サイズ

入間川2(徳林寺墓地)
高さ148cm 幅39cm
台座高さ23cm 台座幅47cm

○薬師如来

薬師如来は、その名からもわかるように、万病を治すとともに人の寿命を延ばし、医薬をつかさどる仏として、古くから信仰されてきました。

この薬師如来は、入間川2丁目の徳林寺墓地にあり、宝永6年(1709)に造立されたものです。

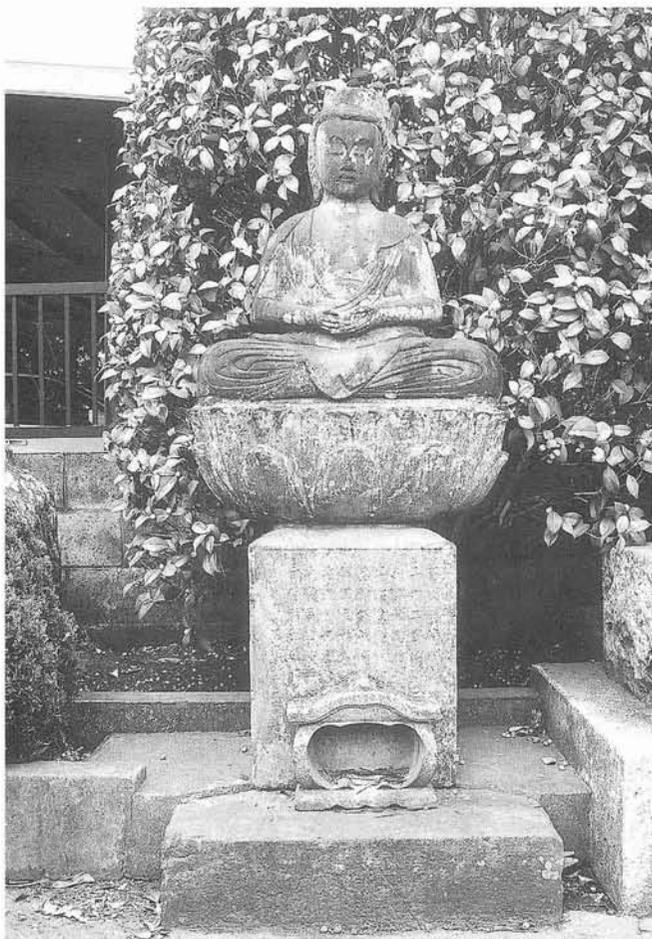
この石仏は、丸彫りの立派なものですが、290年余もの長きにわたって風雨にさらされ

てきたためか、尊顔や衲衣の一部が苔むしています。その姿は、両手で薬壺を持つ薬壺印の形に造られています。

23

大日如来

だいにちによらい



所在地

上奥富(瑞光寺内)
高さ 74 cm 幅 71 cm
台座高さ 71 cm 台座幅 89 cm

大日如来

「大日」とは、偉大な輝くものを意味し、宝冠を戴き装身具を身につけた菩薩の姿をしているのが、他の如来と異なります。

大日如来には、「智」を表す金剛界大日と「理」を表す胎藏界大日がありますが、金剛界大日は左手人差し指を右手で握る智拳印を結び、胎藏界大日は両手のひらを重ねて親指の先をつける法界定印を結んでいるので、容易に見分けることができま

す。

この大日如来は、上奥富の瑞光寺参道にあり、享和2年(1802)に造立されたものです。法界定印を結ぶこの石仏は、同寺26世の祐海によって建てられたものですが、装身具は省略されています。

地藏菩薩

地藏菩薩は、頭をまるめて法衣をまとうお坊さんの姿に似ているため、もともと庶民に親しまれている仏といえます。それは、市内に残る700基余の石仏のうち、地藏が約3割の204基にのぼることからもわかります。

○地藏信仰

地藏菩薩は、釈迦如来が亡くなってから56億7000万年後に弥勒菩薩が現れるまでの間、この世にあって私たち衆生を救い、極楽へ行けるように力を貸してくれる仏とされています。

地藏信仰は、平安時代中期以降に極楽浄土の信仰が盛んになり、末法思想が起こるにつれて全国的に広まりました。そして江戸時代になると、民間信仰と結びつき、庶民のあらゆる願いをかなえてくれる仏となったのです。

地藏菩薩に刻まれた銘文をみると、「奉造立地藏菩薩」が多数を占めますが、「二世安楽供養」「二親菩提也」「有縁無縁」などと刻まれたものもしばしばみられます。これは、死者の菩提を弔うとともに、みずからの現当二世安楽を祈願したものが多くということの証しです。

○造立の時代的推移

地藏菩薩は、元禄から享保年間(1688～1736)にかけて造立数が多くなり、第1期を迎えます。

第2期は、安永から天明年間(1772～89)

にかけてで、その後はしだいに減少しますが、天保から嘉永年間(1830～54)と明治30年代(1897～1906)にかけて微増します。

昭和になるとその造立は極端に減りますが、戦後の高度経済成長期である36年(1961)を境に再び急増し、第3期を迎えます。経済の成長は、私たちの生活を豊かにしましたが、精神的にはゆとりのない社会へと変質してしまいました。この時期に地藏菩薩の造立が増えたのは、こうした社会経済状況を反映してのものと思われる。

○造像上の特徴

地藏は菩薩なので、本来は宝冠を戴き装身具を身につけた形をとるべきですが、頭をまるめて法衣をまとうお坊さんに似ています。それは、いかめしい菩薩の姿では衆生が近づきにくいだろうという地藏の大慈悲が、そうさせたのだといわれています。

石仏では、右手に錫杖を、左手に宝珠を持つ立像が大部分を占めています。錫杖とは、僧侶が持つ環のついた杖で、もともとはインドの僧が山野を遊行するとき振り鳴らして毒蛇や害虫を追ったものといわれています。宝珠は如意宝珠ともいい、意のままに宝など出すとともに、病苦を取り除くことができるとされています。

このほかには、座像や半跏趺座像(片足を下へ垂れたもの)の姿をとるものや、六体の地藏からなる六地藏があります。

24 地蔵菩薩

じぞう ぼさつ



所在地
サイズ

水野(下水野児童公園付近)
高さ107cm
幅43cm
台座高さ21cm
台座幅55cm

この地蔵菩薩は浮き彫りの立像で、水野の下水野児童公園付近にあります。造立された貞享2年(1685)は、水野村が新田として開発されてから20年目に当たります。

尊像の上には地蔵菩薩を表す種子「カ」が刻まれ、両側には同村の開発に直接携わったと思われる48人の名前が彫られています。立村から20年という節目にこうした地蔵を建てた理由は、地蔵を介して村人の無事平穏を願うと同時に、村の永続を祈ると

いった気持ちがあったためと考えられます。

写真でみるように、この地蔵はいつも荒縄でしばられています。これは願かけのときにしばり、願いがかなったらほどいてやるという、庶民の純朴な信仰心からきたものです。

なお、この地蔵は、俗に「化け地蔵」と呼ばれています。「伝説を伴う石仏(P14)」参照。

25 地蔵菩薩

じぞう ぼさつ



所在地
サイズ

入間川2(徳林寺内)
高さ167cm
幅37cm
台座高さ10cm
台座幅60cm

この地蔵菩薩は丸彫りの立像で、入間川2丁目の徳林寺境内にある「子育て地蔵尊」という小さなお堂に祀られています。

元禄6年(1693)に建てられたこの地蔵は、安産と子育てに霊験があるとして、今でもお参りにみえる人々がいます。それは、たくさんのだれ掛けや釋とともに、千羽鶴や子供の遊び道具が奉納されていることからわかります。

また、お堂の右側には穴空き石がたくさ

んありますが、これは耳の不自由な人が、「よく聞こえますように」との願いを込めて納めたものです。「伝説を伴う石仏(P4)」参照。

26

地蔵菩薩
じぞう ぼさつ



所在地
サイズ

加佐志(共同墓地)
高さ144cm
幅52cm
台座高さ40cm
台座幅60cm

この地蔵菩薩は浮き彫りの立像で、加佐志かざしの共同墓地きょうどうぼみにあり、元禄7年(1694)に造立されたものです。

この地蔵は、風下かざし(加佐志)村むらの斎日衆さいにちしゅう中の人々が現当二世安楽を願って建てたものですが、いつのころからか、耳だれの病みみだれのびょうに御利益ごりやくがあるといわれるようになりました(「伝説を伴う石仏(P21)」参照)。

27

地蔵菩薩
じぞう ぼさつ



所在地
サイズ

入間川1(慈眼寺)
高さ165cm
幅33cm
台座高さ63cm
台座幅46cm

この地蔵菩薩は丸彫りの立像で、入間川1丁目いげんじの慈眼寺裏のお堂の中にあり、元禄15年(1702)に建てられたものです。

尊像には、法華經の偈ほけぎょうげ(仏を称える言葉を詩の形に整えたもの)が刻まれています。この地蔵は俗に「黒くなったお地藏さま」と呼ばれています(「伝説を伴う石仏(P14)」参照)。

28 地藏菩薩

じぞう ぼさつ



所在地
サイズ

狭山(田中共同墓地)
高さ129.5cm
台座高さ35.5cm
幅30cm
台座幅40cm

この地藏菩薩も丸彫りの立像で、狭山の田中共同墓地たなかにあり、宝永5年(1708)に造立されたものです。

この地藏は、尊像全体が穴だらけになっていますが、こうした痛ましい姿になったのは、村人が小石でたたきながら、病が治るのを祈ったためです。そのため、いつのころからか「田中のカンカン地藏」と呼ばれるようになりました(「伝説を伴う石仏(P4)」参照)。

29 地藏菩薩

じぞう ぼさつ



所在地
サイズ

中新田(愛宕神社)
高さ59cm
幅28cm
台座高さ20cm
台座幅35cm

この地藏菩薩は浮き彫りの座像で、中新田の愛宕神社境内なかしんでんにあり、正徳5年(1715)に建てられたものです。

この地藏は、台座正面に9人の戒名かいみょうが刻まれているので、亡くなった人の菩提ぼだいを弔う目的で造立されたものです。

30 地蔵菩薩

じぞう ぼさつ



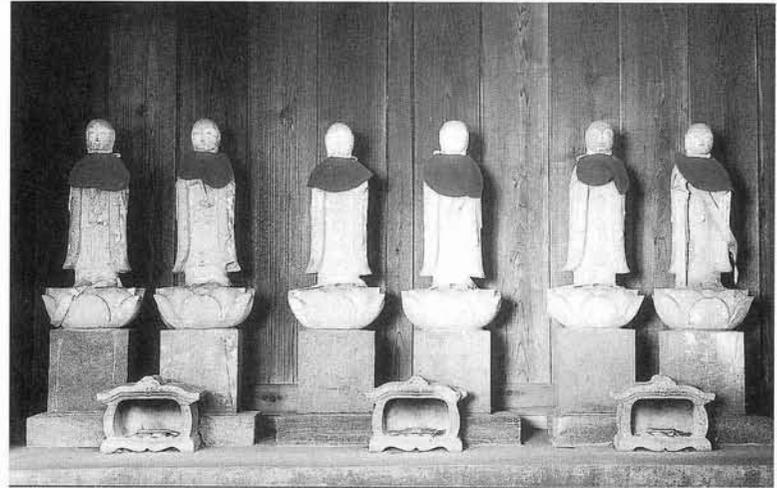
所在地
サイズ
柏原(常楽寺内)
高さ124cm
台座高さ60cm
幅43cm
台座幅23cm

この地蔵菩薩は半跏趺座像で、柏原の常楽寺境内にあり、宝暦7年(1757)に造立されたものです。

この地蔵は、台座正面に延命地蔵菩薩經の偈が刻まれています。

31 六地蔵

ろくじぞう



所在地
サイズ
根岸(明光寺内)
高さ55cm
台座高さ40cm
幅20cm
台座幅24.5cm

これは丸彫りの六地蔵で、根岸の明光寺境内にあり、天明3年(1783)に造立されたものです。

私たち衆生が、その業によって生死を繰り返す6つの世界(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人界・天界)を六道といいますが、六道輪廻の業から脱け出せない衆生に対し、みずからそこに赴いて救済に当たるのが地蔵菩薩であるところから、六地蔵の造立がはじまりました。

ばとう
馬頭観音

馬頭観音は、その名が示すように頭上に馬を戴く姿をしており、市内では地藏菩薩に次ぐ135基が造立されています。

○造立の時代的推移

市内における馬頭観音の造立は、正徳元年(1711)からはじまります。

その造立が第1期を迎えるのは、享保から寛政年間(1716～1801)にかけてで、像容を刻むものがほとんどです。このころの石仏は、その銘文から現代二世安楽を願うものと、特定の馬の供養を願うものの2種類があり、造立者も村中や講中のほかに、個人のもので混じります。

第2期は、文化から嘉永年間(1804～54)にかけてで、とくに天保3年(1832)以降は文字塔の造立が急増し、しかも馬の供養塔としての性格が強くなります。また、道しるべとしての造塔もみられるようになります。

第3期は、明治年間(1868～1912)にかけてで、このころになると馬の墓石としての造塔となり、すべてが文字塔となります。

○造像上の特徴

馬頭観音は、それ自体を像容で現したものと文字塔に分類できます。

像容を刻んだものは、1面2臂・1面6臂・3面6臂・3面8臂などがあり、いずれも明王馬口印を結んでいます。ほとんどが立像ですが、なかには座像もあります。

文字塔は、寛政7年(1795)から造立がはじまりますが、初期のものは「馬頭観世音菩薩」といねいに刻むものが多く、時代が下るにしたがって「馬頭観世音」「馬頭観音」と彫るものが出てきます。また、馬の墓石として建てられたものは、小型なものが目立ちます。

32
馬頭観音

所在地

青柳
高さ 93 cm
幅 31 cm
台座高さ 22 cm
台座幅 41 cm



この馬頭観音は1面6臂の立像で、青柳にあり、享保14年(1729)に造立されたものです。頭上の馬は一部が欠けているためはつきりませんが、それ以外は彫りもしっかりしており、持物も斧・蓮華・弓が確認できます。

この石仏の最大の特徴は、持物の上にある「𪛗」の文字で、これが刻まれているのは市内でこれ1基のみです。「ウハッキュウ」と読むこの文字は、「鳥八白」の合字とされています。鳥八白については、これまでにさまざまな説が提示されて

いますが、それらを要約すると、①鳥の意味、②鳥を追い払う鶺鴒(サギに似た鳥)の変化したもので、この鳥名を刻むことにより供物に近づく鳥を払う、③日月の意味、④優婆塞・優婆夷の意味、⑤梵字合字の崩れ、⑥𪛗の合字、⑦大迦葉が成仏の印として弟子に授けた字形、(キュウは「キ」、すなわち帰と八との「キハチ」に白の「ウ」を加え「キキュウ」、すなわち「帰空」を表す、)カン、タンと読みツイバムの意味など、驚くほど多岐にわたっています。

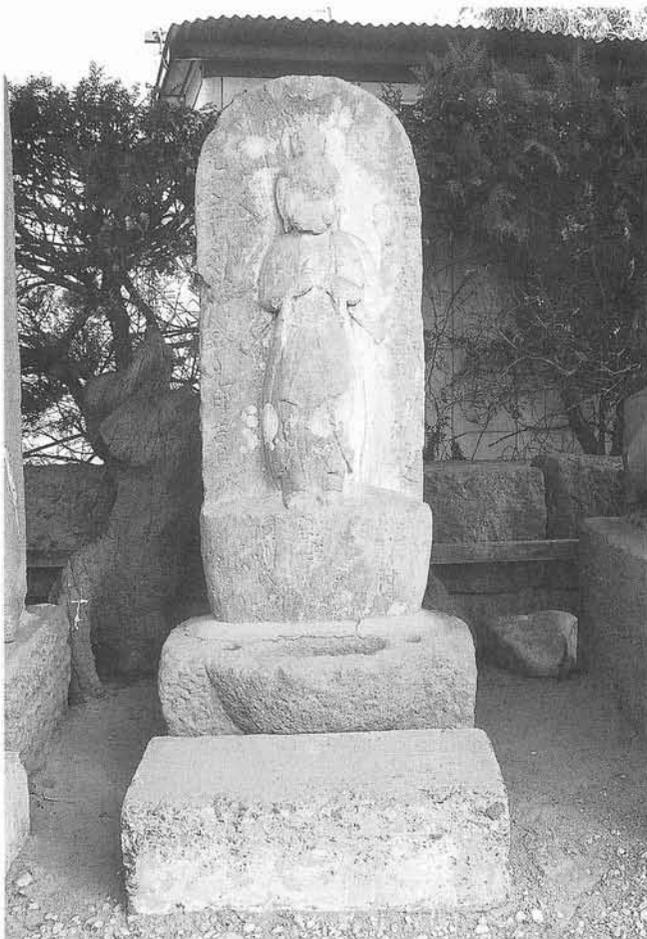
33

馬頭観音

ばとう かのんのん

所在地
サイズ

堀兼(権現橋脇)
高さ113cm
幅38cm
台座高さ29cm
台座幅50cm



これも1面6臂の立像で、堀兼の権現橋のたもとにあり、元文5年(1740)に造立されたものです。

この馬頭観音は、像容の向かって右に「為先祖有縁聖霊追建立之」と刻まれているので、先祖や諸霊を含めて供養し、二世安楽を願ったものであることがわかります。6手のうち2手は明王馬口印を結び、残りの4手は斧・宝輪・弓・矢を持っています。

34

馬頭観音

ばとう かのんのん

所在地
サイズ

入間川2(福德院)
高さ71cm 幅44cm
台座高さ75cm 台座幅54cm



この馬頭観音は3面8臂の座像で、入間川2丁目の福德院境内にあり、寛保元年(1741)に造立されたものです。

この石仏の持物は、手先の部分が欠けているため不明ですが、台座の両側面には法華経の偈の一部と「入間川惣村中」の文字があるので、村中で現当二世安楽を祈って建てたものであることがわかります。

35

馬頭観音

ばとう かのん



所在地
サイズ

下奥富(八雲神社付近)
高さ 55 cm 幅 28 cm
台座高さ 24 cm 台座幅 32 cm

この馬頭観音は3面6臂の立像で、下奥富の八雲神社付近にあり、安永8年(1779)に造立されたものです。

馬頭観音はふつう、怒った顔立ちで表現されますが、この石仏は大変穏やかな表情をしています。6本の手のうち、上の2手は三叉鉞と宝輪を持っていますが、下の2手は何も持っておらず、残りの2手は明王馬口印を結んでいます。

右側面をみると、「によせちく志うほつぼだ

い也(如是畜生発菩提也)」と刻まれているので、家族同様に寝起きをともにした愛馬の死をいたみ、その菩提を弔うために建てたものであることがわかります。銘文が漢字でなく仮名で刻まれているのは、道を往来する多くの人々に手を合わせてもらいたいという、造立者の気持ちの表れといえます。

なお、この石仏は「イボ神さま」ともいわれています(「伝説を伴う石仏(P51)」参照)。

36

馬頭観音

ばとう かのん



所在地
サイズ

下広瀬(ヤオコー前の墓地)
高さ 94 cm 幅 42 cm
台座高さ 93 cm 台座幅 91 cm

この馬頭観音は文字塔で、下広瀬の広瀬橋付近にあり、文政13年(1830)に造立されたものです。

台座をみると、正面に「総邨中」とあり、右側面には「両広瀬村」とあるので、上下広瀬村の人々によって建てられたものであることがわかります。またこの石塔は、「日暮らしの馬頭さま」と呼ばれています(「伝説を伴う石仏(P76)」参照)。

37

馬頭観音
ばとう かのんの



所在地
サイズ

水野(山王小学校正門附近)
高さ43cm 幅25cm
台座高さ13cm 台座幅40cm

この馬頭観音も文字塔で、^{みずの}水野にあり、明治18年(1885)に建てられたものです。

この石塔は、愛馬の死を弔って建てた墓石としての性格を持つもので、春秋の彼岸には施主の手で線香を供えるとのこと。

38

馬頭観音
ばとう かのんの



所在地
サイズ

南入曾(中央霊園)
高さ69cm 幅27.5cm
台座高さ31cm 台座幅56cm

この馬頭観音も文字塔で、^{みなみりそ}南入曾の中央霊園内にあり、^{かんせい}寛政11年(1799)に造立されたものです。

この石塔は、正面に馬頭観音を表す種子「カーン」があり、その下に「馬頭明王」と刻まれています。馬頭明王の文字を刻むものは、市内ではこれ1基のみです。

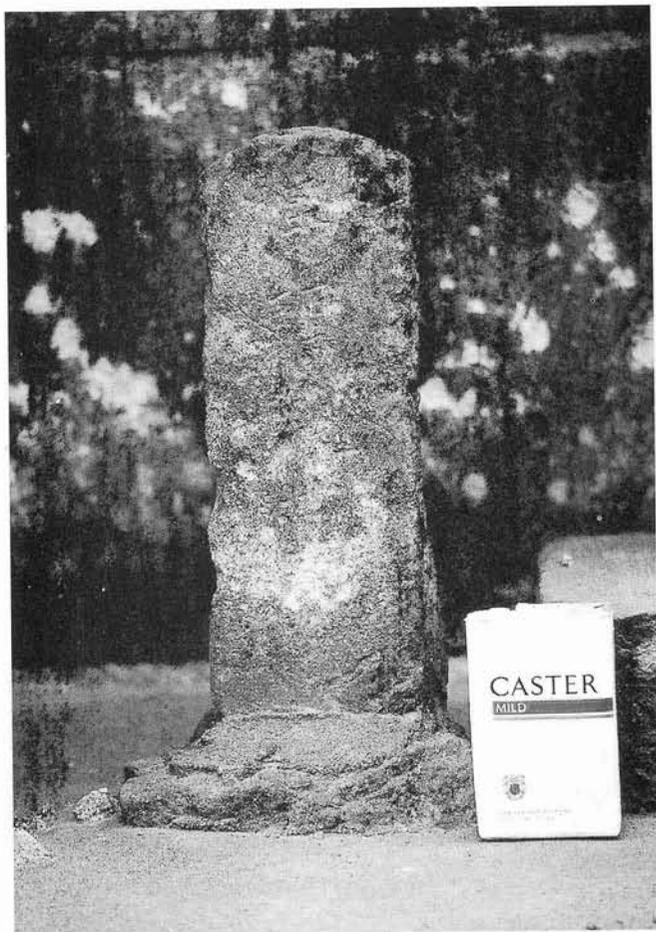
39

馬頭観音

ばとう かんのおん

所在地

高さ 24 cm
幅 9 cm
祇園(三軒屋墓地)



この馬頭観音も文字塔で、祇園の三軒家墓地にあります。造立年は不明ですが、市内でもっとも小さな馬頭観音です。

観音菩薩

観音菩薩には、前述した馬頭観音のほか、聖観音・如意輪観音・千手観音・十一面観音などがあります。しかし石仏に限ってみると、馬頭観音以外の造立は多くありません。ただし、江戸時代の女性の墓石には、聖観音・如意輪観音が多数みられます。

観音信仰は、仏教が伝来したときからはじまりますが、平安時代末期から鎌倉時代にかけて浄土信仰が盛んになると、阿弥陀如来の脇侍として、浄土に往生する際に大切な役割を果たす菩薩として信仰されるようになりました。また、六道輪廻の思想が広まると、六道に6体や7体の観音を配することも行われました。そして、西国・坂東・秩父の観

音霊場巡拝が庶民の間に普及すると、観音信仰はより生活に密着したものになっていきました。

伝説を伴う石仏

【いぼ神さまと豆だわら】(奥富)



むかし、奥富にすむ人が、いぼができて苦しんでいたそうです。ある日、古老から八雲神社のうら手鎌倉街道ぞいにある馬頭さんが、いぼによく効くからとおそわり願かけに出かけました。雨の日も風の日も一日もかかすことなく一心に祈りましたので、いぼがすっかりなくなりおおよるこびでした。願いがかなえられた時は、かならずお礼として三個の白い豆だわらを供えます。これは、「おかげさまで、いぼがなりましたので、これからはまめにはたらけます」という意味もあったそうです。

馬頭さんは「いぼ神さま」と呼ばれ今もたっています。(写真35)

40 聖観音

しょうかんのん



所在地
サイズ

沢(天岑寺内)
高さ115cm
台座高さ40cm

幅27cm
台座幅30cm

○聖観音

聖観音は、左手で蓮華を持ち、右手は蓮華に添えるか、または手のひらを向けた与願印を結ぶものが多く、女性の墓石にみられます。しかし、石仏としての造立は少なく、市内では文字塔を含めて12基しかありません。

この聖観音は丸彫りの立像で、沢の天岑寺境内にあります。造立年は不明ですが、慈愛に満ちたその表情と、未敷蓮華(つぼみの蓮華)を手にしたやさしい姿は、いか

にも女性的です。

41 如意輪観音

にょいりんかんのん



所在地
サイズ

下奥富(西方自治会館裏)
高さ82cm
幅53cm
台座高さ100cm
台座幅57cm

○如意輪観音

如意輪観音も石仏としての造立は少なく、わずかに6基を数えるのみです。その像容は頬づえをつく姿に造られ、いずれも片膝を立てた半跏像です。

この如意輪観音は丸彫りの半跏像で、下奥富の西方自治会館裏にあり、正徳6年(1716)に造立されたものです。

台座正面には、一部判読が不能ながら銘文が刻まれています。それによると、この石

仏は群衆の中にあって、人々を苦界から救うことを願って建てられたものと思われます。

42 七観音

しちかんのん



所在地
サイズ

入間川2(徳林寺内)
高さ70cm 幅15cm
台座高さ40cm 台座幅30cm

○七観音

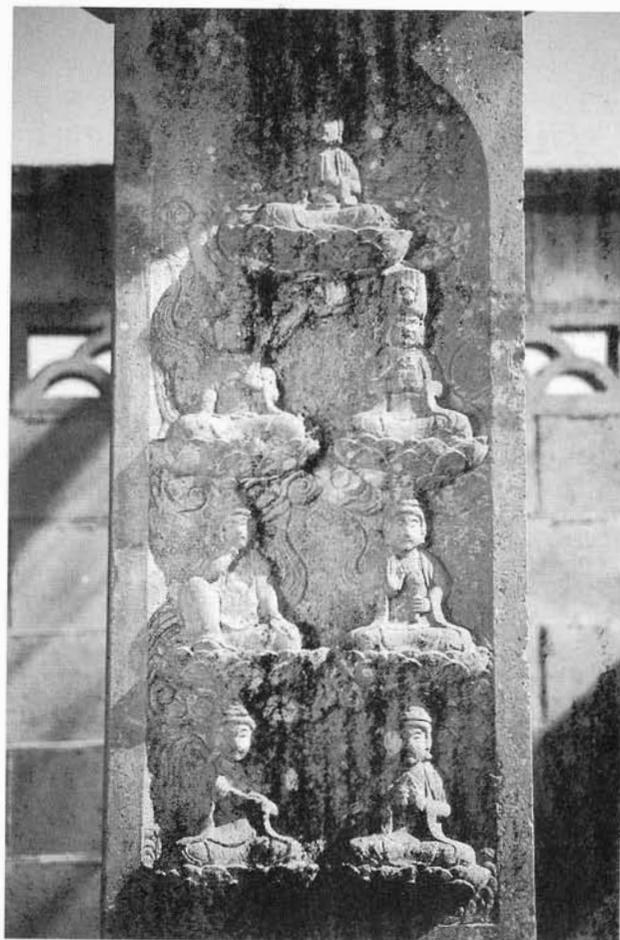
七観音は、六道に千手観音(地獄)・聖観音(餓鬼)・馬頭観音(畜生)・十一面観音(修羅)・准胝観音(人界)・如意輪観音(天界)を配したもので、天台宗では准胝観音の代わりに不空罽索観音を加えますが、石仏では7体を個別に、または一石に7体を刻むものの2種類があります。

これは7体が並ぶもので、入間川2丁目の徳林寺境内にあります。寛政5年(1793)に造

立されたこれらの石仏は、その銘文から、同寺の檀家を中心とした人々の手により祀られたものであることがわかります。

43 七観音

しちかんのん



所在地

柏原(常楽寺内)
高さ175cm 幅44cm
台座高さ39cm 台座幅68cm

これは一石に7体を刻むもので、柏原の常楽寺にあり、天保15年(1844)の造立です。この石仏は、斎日講により建てられたものですが、不空罽索観音の代わりに楊柳観音が刻まれています。

伝説を伴う石仏

【耳の石仏さま】(柏原)

むかし、中本宿の草むらに片手を耳にあてているちょっと風がわりな石仏がありまし



た。ある暑い日のことです。耳のとおくなつたおじいさんが通りかかりました。

「おー、お前さまも耳が悪いのかね、頭巾もかぶらねえてお天道さまにジリジリとあぶられちゃたいへんじゃわい」といって小川から冷たい水をすくい石仏にかけてあげました。そんなことのあったある朝のことおじいさんの耳がよく聞こえるようになりました。

これは、いつも誰にでも親切にしているおじいさんへの、石仏の恩返しだといわれ、耳の石仏さまと呼ばれ大評判となりました。

今も円光寺の山門よこにちょこんと座っています。(写真55)

伝説を伴う石仏

【大六天さま】(柏原)

むかし、柏原にきれいな好きなおばあさんがすんでいました。それは病てきなほどでした。ある日のこと、中本宿にある「大六天さま」の前を通りかかったときです。子どもたちがおおぜいで、へいそくやダルマをあたりいちめにちらかして遊んでいました。

おばあさんは子どもたちをしかりつけ、きれいに掃きよめてさっさといてしまいました。ところがあくる日、おばあさんは急に原因不明の腹痛となり、寝こんでしまいました。これは大六天さまは常にちらかしていることを好む神さまで、ちらかしてあるもの



をかたづけたり、掃除をしたりすると、その人にたたりがあるとされています。

世の中には、いろいろな神さまがあるものですね。その後、大六天さまはもとのとおりちらかされ、おばあさんも元気になったということです。(写真66)

經典供養塔

仏教を構成する3つの要素に「三宝」があります。三宝とは「仏・法・僧」のことですが、このうちの法が文字で記された經典といえます。

經典供養塔とは、ありがたいお経を読んだり書き写したりすることに、はかり知れない功德があるとする仏教の教えに基づいて造立されたものです。

経典読誦供養塔

経典供養塔の中で、もっとも多く造立されているのは経典読誦供養塔です。この供養塔は、大乘妙典(法華経)や大般若経・光明真言などの経典を、一定回数読誦した記念に造立されたものです。

○大乘妙典(法華経)読誦供養塔

大乘妙典とは、私たち衆生を迷いから悟りの世界に導いてくれる経典で、一般的には法華経、すなわち妙法蓮華経をさすといわれています。

石塔には、「奉読誦大乘妙典一千部供養」「妙法千部供養」などと刻まれることが多く、市内では18世紀初頭から造立がはじまります。

○普門品読誦供養塔

普門品読誦供養塔とは、法華経のうちの観世音菩薩普門品(ふつう観音経という)を、一定回数読誦した記念に造立した供養塔です。

この石塔は、19世紀になってから造塔がはじまりますが、前述した大乘妙典読誦供養塔が先祖の追善供養や極楽浄土を求めるなど、どちらかというと個人的色彩が強いのに対し、普門品読誦供養塔は、村落共同体の安泰を願って造立されています。

○大般若経読誦供養塔

大般若経読誦供養塔とは、大般若経600巻を読誦した記念に造立した供養塔です。

○光明真言読誦供養塔

光明真言は23(休止符を入れると24)の梵字からなり、「オン、アボキヤ、ペイロシャノウ、マカボドラ、マニ、ハムドマ、ジンバラ、ハラバリタヤ、ウム」と読みます。

これには、「大日如来よ、智慧と慈悲をたれてお救い下さい」との意が含まれ、これを読誦すると一切の罪障が除かれるとされたため、100万遍、200万遍と唱えた記念に供養塔が造立されました。



これは文字塔で、鶴ノ木の長栄寺墓地にあり、宝永6年(1709)に造立されたものです。

上部に種子で阿弥陀三尊を刻み、その下に「奉読誦大乘妙典一千部諸願成就処」とあるこの石塔は、先祖や父母の菩提を弔う目的で法華経1000部を読誦した記念に建てた旨が、両側面に刻まれています。

44 大乘妙典読誦供養塔

所在地 鶴ノ木(長栄寺墓地)
サイズ 高さ183cm 幅58cm

45

だいじょうみょうてんぐんじゆ
大乘妙典読誦供養塔

所在地
サイズ

沢天岑寺内)
高さ51・5cm 幅50cm
台座高153・5cm 台座幅44・5cm



これは丸彫りの阿彌陀如来にょらいを主尊とするもので、沢さわの天岑寺境内てんしんじにあります。

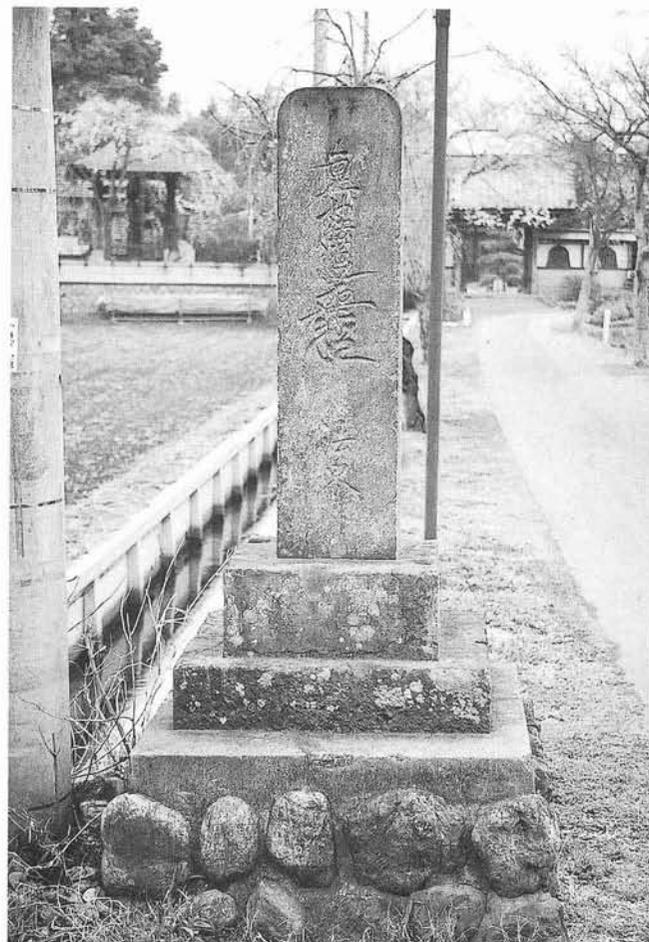
文化9年(1812)に建てられたこの供養塔は、台座正面に「大乘妙典千部供養塔」とあり、右側面には法華經の偈げが刻まれています。

46

だいじょうみょうてんぐんじゆ
大乘妙典読誦供養塔

所在地
サイズ

上広瀬(信立寺参道入口)
高さ131cm 幅35cm
台座高さ43cm 台座幅88cm



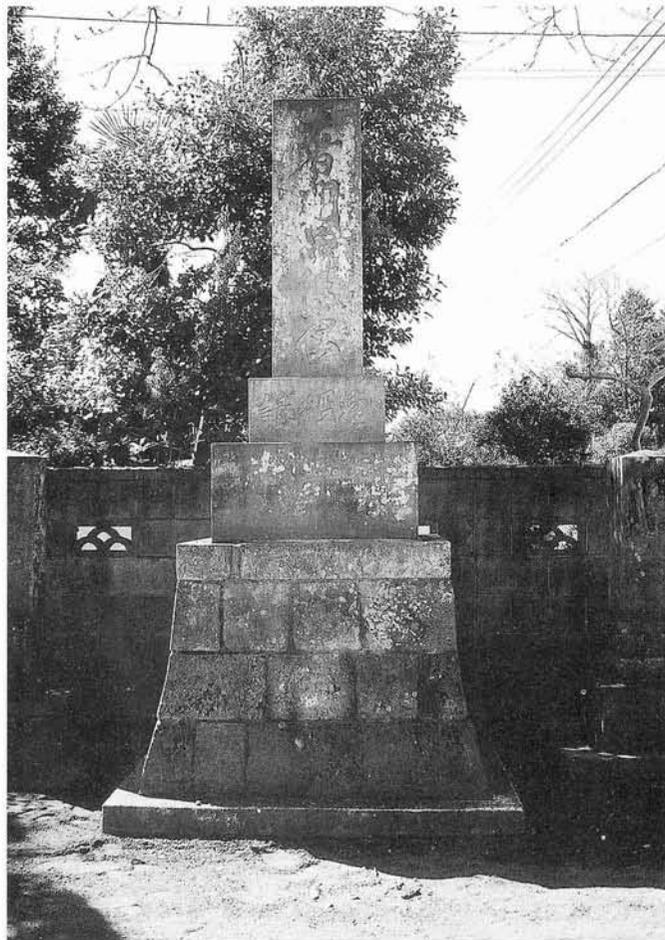
これは文字塔かみひろせで、上広瀬しんりゅうじの信立寺参道入口あんえいにあり、安永5年(1776)に建てられたものです。

同寺は市内唯一の日蓮宗寺院ですが、そのためかこれには、「南無妙法蓮華經」が「髭題目ひげだいもく」と称する独特の書体で刻まれています。

47

普門品読誦供養塔

ふもんほんどくじゆ



所在地
サイズ

所在地 柏原(長源寺内)
高さ 117 cm
幅 37 cm
台座高さ 158 cm
台座幅 80 cm

これは文字塔で、^{かしわばら ちょうげんじ}柏原の長源寺境内にあり、^{けいおう}慶応元年(1865)に造立されたものです。台座正面に「^{れんきょう}連経講」とありますが、これは観音講のことと思われます。

48

普門品読誦供養塔

ふもんほんどくじゆ



所在地
サイズ

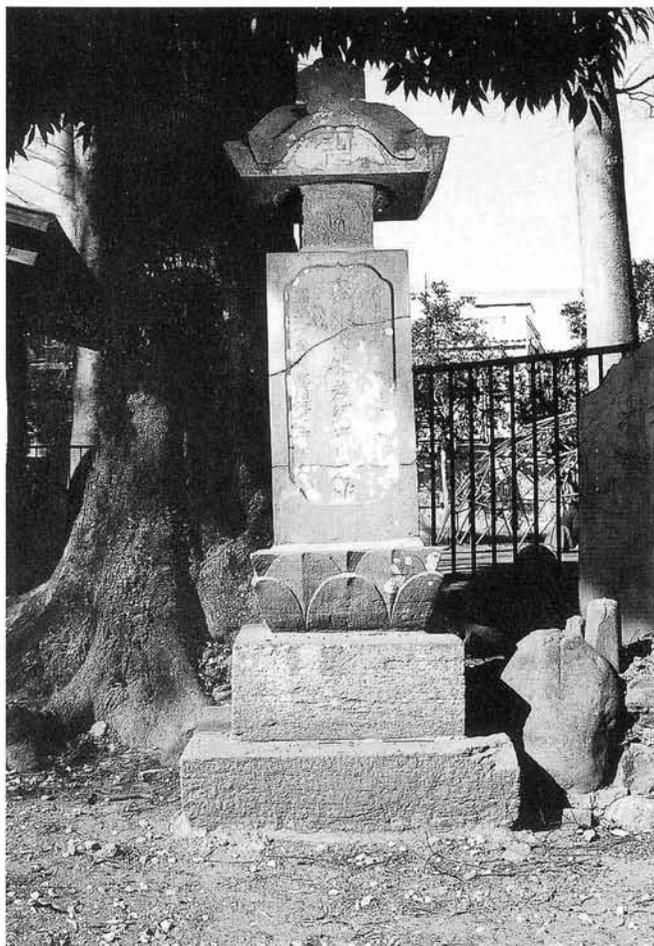
所在地 下広瀬
高さ 87 cm
幅 33 cm
台座高さ 72 cm
台座幅 71 cm

これも文字塔で、^{しもひろせ}下広瀬にあり、慶応2年(1866)に建てられたものです。

この石塔は、^{しもごう かみごう}下郷15人、上郷5人からなる観音講中が造立したもので、その目的は普門品1万卷を読誦した記念に、村落の安泰を願って建てたことが、右側面に刻まれた「^{あまのやすらひ}天下泰平百稼成実」の銘文からわかります。

49

だいほんにやきょうどくじゆ
大般若経読誦供養塔



所在地
サイズ

根岸(明光寺内)
高さ120cm
幅33cm
台座高さ40cm
台座幅50cm

これは文字塔で、根岸の明光寺ねがし みょうこうじにあり、享保14年(1729)に造立されたものです。

正面に「奉納大般若経六百卷所」とあるこの石塔は、天下泰平と国土安全を願って大般若経600卷の読誦を終えた法会ほうえを開いた際、その記念として建てたものであることが銘文から読み取れます。

50

こうみやうしんこんどくじゆ
光明真言読誦供養塔



所在地
サイズ

南入曾(金剛院裏)
高さ128cm
幅37cm
台座高さ25cm
台座幅55cm

これは浮き彫りの大日如来を主尊とするもので、南入曾みなみいりぞの金剛院裏こんごういんにあり、文久2年(1862)に建てられたものです。

正面上部に光明真言を円形に配置し、その下に大日如来を配した石塔は、天下泰平と国土安全を願う講中により造立されたものです。

しゃきよう
写經供養塔

写經供養塔とは、法華經や大般若經などの經典を後世に伝えるために書き写したり、あるいは写經することを修行とし、これを果たした功德として造立された供養塔のことをいいます。

ねんぶつ
念仏供養塔

念仏とは、仏の功德や姿を心に思い浮かべ、「南無阿彌陀仏」の名号を口で唱えることをいいます。

我が国では、平安時代中期以降、仏教上の歴史観である末法思想が、打ち続く戦乱や災害の続発から来る社会不安により徐々に浸透すると、南無阿彌陀仏を唱えさえすればだれでも極楽往生できるという教えが急速に広まりました。

そしてこの信仰は、やがて多くの庶民の支持を得ようになり、江戸時代になると各地に念仏講が結成され、百万遍念仏供養塔・六斎念仏供養塔・寒念仏供養塔などが造立されるようになりました。

○念仏供養塔の主尊

市内には、56基にのぼる念仏供養塔の存在が確認されています。

このうち像容を刻むものは52基ですが、これを主尊別に分類すると、47基が地藏菩薩であり、残りは聖観音・阿彌陀如来・馬頭観音が各1基となります。

○造立年代

市内で最初に念仏供養塔が建てられたのは寛文13年(1673)で、下奥富の広福寺墓地にありましたが、今は失われてしまいました。造立が増えるのは享保から元文年間(1716~1741)にかけてで、なかでも享保4年(1719)には9基が造立

されています。この傾向は入間市・飯能市でもみられるので、この年に何があったのか興味を引かれますが、現在のところ不明です。

その後は、寛延年間(1748~51)と宝暦年間(1751~64)に各3基、天明年間(1781~89)と天保年間(1830~44)に各4基が建てられますが、幕末の安政7年(1860)を最後に、以後はまったくみられなくなります。

○造立者と造立の趣旨

念仏供養塔を造立者別に分類すると、次のようになります。

- ①「念仏講」「講中」「結衆」などの集団名を刻んだもの→23基
- ②「村中」「惣村中」など、村落共同体を刻んだもの→12基
- ③「同行何人」または単に人数などを連記したもの→5基
- ④「六斎日」「斎日」の文字を刻んだもの→9基
- ⑤個人名を刻んだもの→4基
- ⑥「念仏講中」と「村中」を併記したもの→1基
- ⑦「斎日講中」と「惣村中」を併記したもの→1基

こうしてみると、念仏信仰は個人的なものではなく、その信仰を中軸として結成された念仏講が主体であったことがわかります。

次に、造立の趣旨をみると、造立初期は「二世安楽」「西方往生」を刻むものが多く、後期になると主尊のほとんどが地藏であったためか、仏説延命地藏菩薩經の偈を刻むものが多くなります。

以上のことから念仏供養塔の造立は、この世とあの世の二世にわたり、すべての災厄を除いて安穏な村を作りあげたいとの願いから生まれたものといえます。



これは浮き彫りの如意輪観音を主尊とするもので、狭山の消防団消防小屋裏の墓地にあり、安永2年(1773)に造立されたものです。

台座正面に「石経塔」と刻まれたこの石塔は、田中村の農民により建てられたものです。石経とは、法華經などの經文を1文字ずつ石に写すことで、紙に書き写すよりも数倍の時間がかかりますが、その反面、より多くの人が関与できたため、こうした石塔が造られ

51
写經供養塔

所在地
サイズ

狭山(消防小屋裏墓地)
高さ71cm
幅38cm
台座高さ70cm
台座幅31cm

るようになりました。

52

ねんぶつ
念仏供養塔

所在地
サイズ

下奥富
広福寺墓地(現存せず)
(現存しないため計測不能)



これは浮き彫りの地蔵菩薩を主尊とするもので、下奥富の広福寺墓地にあり、市内最古のものでしたが、現在は失われてありません。

寛文13年(1673)に造立されたこの石仏は、その銘文に「二世祈者也」とあるので、12人からなる念仏講中の手で、二世安楽を願って建てられたことがわかります。

53

ねんぶつ
念仏供養塔

所在地
サイズ

柏原(東上宿バス停付近)
高さ150cm
幅50cm
台座高さ32cm
台座幅56cm



これも浮き彫りの地蔵菩薩を主尊とするもので、柏原の上宿にあり、元禄4年(1691)に造立されたものです。

この石仏は、正面上部に地蔵を表す種子「カ」があり、その下に像容が刻まれています。像容の向かって右に「二世安楽」、左に「同行四拾五人」とあるので、同信者による集団が二世安楽を願って建てたものであることがわかります。

54

念仏供養塔
ねんぶつ

所在地
サイズ

所在地 笹井(宗源寺内)
高さ 95 cm
幅 30 cm
台座高さ 83 cm
台座幅 50 cm



これも浮き彫り地藏菩薩を主尊とするもので、笹井の宗源寺入口にあり、享保4年(1719)に造立されたものです。

この石仏は、台座に刻まれた銘文から、笹井村の村人が建てたものであることがわかります。この年は、隣接する根岸村をはじめ、入間川・北入曾・加佐志・上奥富・下広瀬など、計8か村で同様な供養塔が造立されています。

55

六斎念仏供養塔
ろくさいねんぶつ

所在地
サイズ

所在地 柏原(円光寺内)
高さ 78 cm
幅 49 cm
台座高さ 84 cm
台座幅 49 cm



これは半跏趺座像の地藏菩薩を主尊とするもので、柏原の円光寺にあり、寛延2年(1749)に造立されたものです。

この石仏は、齋日講中の善男善女が建てたものですが、「齋日」とは、毎月8日・14日・15日・23日・29日・30日の6日間をさし、この日は仏教上の八齋戒を守り身を慎む精進日で、鉦や太鼓をたたいて念仏を唱えました。そのためこれを、「六斎念仏」ともいいます。

なお、この供養塔は、地藏が頬づえをつく

ように右手で耳を覆う姿をしているため、いっのころからか「耳の石仏さま」と呼ばれ、耳の病に霊験があるといわれるようになりました(「伝説を伴う石仏(P56)」参照)。

56

かんねんぶつ
寒念仏供養塔

所在地
サイズ

中新田(愛宕神社)
高さ113cm
幅44cm
台座高さ18cm
台座幅60cm



これは浮き彫りの地藏菩薩を主尊とするもので、中新田の愛宕神社境内にあり、宝永7年(1710)に造立されたものです。

この石仏は、寒念仏供養塔といわれるものです。「寒念仏」とは、1年でもっとも寒さの厳しい小寒から節分までの30日間にわたり、鉦をたたき念仏を唱えながら諸所を巡回する一種の苦行です。銘文によると、この造塔は隆宗和尚の発願により行われたもので、それには13人の同行者がいたことがわ

かります。
なお、この石仏は道しるべにもなっています。

57

ひやくまんべんねんぶつ
百万遍念仏供養塔

所在地
サイズ

堀兼(光英寺内)
高さ112cm
幅36cm
台座高さ15cm
台座幅47cm



これは文字塔で、堀兼の光英寺境内にあり、享保12年(1727)に造立されたものです。

この石塔は、正面上部に阿弥陀三尊の種子があり、その下に「奉造立念仏貳億万遍供養塔」と刻まれています。「貳億万遍」とは、南無阿弥陀仏を2億万回唱えることで、その成就を記念して建てられたものです。銘文をみると「惣人数百十一人」とあるので、多数の村人がこの造塔に関与したことがわかります。

58

念仏供養塔
ねんぶつ

所在地 下奥富
サイズ 広福寺墓地(現存せず)
(現存しないため計測不能)



これは浮き彫りの聖観音を主尊とするもので、下奥富の広福寺墓地にかつてありました。地藏菩薩以外を主尊とするものはわずか3基しかありませんが、延宝元年(1673)に造立されたこの石仏は、そのうちの1基です。

巡拝供養塔

聖地を巡拝することは、世界的にみられます。『日本紀略』には、にほんきりやく 円融院法皇が諸寺を巡拝したことを載せているので、我が国では平安時代から行われていたことがわかります。また、法華経を保存する目的で、全国66か所の霊場に納経して回ることも鎌倉時代初期には行われていました。

こうしたなか、かんのん 観音霊場を巡拝して回る信仰は、江戸時代になって交通網が整備されると庶民の間にも広まりました。

巡拝供養塔とは、こうした霊場を巡拝した記念に建てられたものがあります。

59 回国供養塔

かいこく

所在地

サイズ	下奥富(西方自治会館裏)
台座高さ 25 cm	高さ 110 cm
台座幅 58 cm	幅 38 cm



この供養塔は下奥富の西方自治会館裏しもおくとも にしかたにあり、享保3年(1718)に建てられたものです。

正面に「奉納大乘妙典六十六部供養所」と刻まれたこの石塔は、往山円実おうざんえんじつという僧侶または行者きょうじやが建てたものですが、造立に当たっては下奥富村が助力しています。回国供養は多くの日数と労苦を伴うため、なみなみならぬ信仰心を必要とします。発願主が僧侶や行者であるのはそのためと思われま

すが、これに村中が加わって造塔に当たるのは、人一倍信仰心がありながら回国できない村人が、金銭的な援助をすることで供養に参加したいという気持ちの表れといえます。

かいこく
回国供養塔

回国供養とは、釈迦如来が亡くなってから56億7000万年後に弥勒菩薩が現れて私たち衆生を救ってくれるそのときまで、法華経ほけきょう(大乘妙典)を保存する目的で、我が国の66か所の霊場に納経して回ることをいいます。

市内には13基の回国供養塔が残されていますが、これらを見ると、そのほとんどが18世紀に造立されています。

かんのれいじょう
観音霊場巡拝供養塔

観音霊場とは、西国三十三か所・坂東三十三か所・秩父三十四か所のことで、江戸時代になるとこれら霊場を巡拝することが盛んになりました。巡拝は巡礼や遍路とも呼ばれ、白装束に白足袋をはき、金剛杖をつき、数珠や鉦を手にご詠歌を詠じて巡り歩くことで、巡拝供養塔はその記念に造立されたものです。

市内には18基の供養塔がありますが、その造立は寛政年間(1789~1801)以降から増えるので、このころから経済的余裕のある農民層の間で、巡拝の風潮が広まっていったと考えられます。

むかし、下広瀬の街道わきにりっぱな馬頭観世音の石碑がたっていました。

ある日のこと、石碑の前に一人の旅人が立ちどまり「うーむ、これはすばらしい、なんともみごとな文字じゃ、じつにうまい」とときりに感心し、とうとう座り込んでしまいました。通りかかった人々も、いわれてみると、まことにすばらしい文字じゃと口々にいいながらながめておりました。そのうち、お天道さまも西にかたむき、やがて一番星がかがやきはじまりました。それでも人々は、あきずに馬頭観世音の文字を見つづけておりました。

文字はりっぱでいくら見てもあきないことから、誰いうとなく「ひぐらしの馬頭さん」と呼ばれるようになったということです。

(写真36)

伝説を伴う石仏

【ひぐらし馬頭さん】(水富)



60 回国供養塔

かいこく



所在地
サイズ

南入曽(電車基地北側墓地)
高さ99cm 幅33cm
台座高さ7cm 台座幅60cm

この供養塔は南入曽の電車基地北側の墓地(金剛院墓地)にあり、寛政10年(1798)に造立されたものです。

正面に阿弥陀三尊の種子があり、大きな文字で「奉納大乘妙典日本廻国供養塔」と刻むこの石塔は、その左右に「天下泰平」「日月清明」とあります。この銘文をみると、仏の教えに従って修行を積み、仏の悟りを得ようとする僧侶の姿と、村落の無事安穩を願う気持ちが表れているのを知ることが

できます。

61 観音霊場巡拝供養塔

かんのれいじょうじゅんぱい



所在地
サイズ

南入曽(金剛院内)
高さ89cm 幅37.5cm
台座高さ19cm 台座幅73cm

この供養塔は南入曽の金剛院境内にあり、寛政7年(1795)に造立されたもので、中央に西国を、その両側に坂東・秩父と刻み、合わせて「百番順礼供養塔」と彫られています。

62

観音霊場巡拝供養塔

かんのんれいじょうじゅんぱい

所在地
サイズ

青柳(新屋敷バス停付近三差路)
高さ 85.5 cm 幅 35.5 cm
台座高さ 58 cm 台座幅 77 cm



あわやき あらやしき
この供養塔は青柳の新屋敷バス停付近の三差路にあり、明治26年(1893)に造立されたものです。

この石塔には、百番観音霊場のほかに出羽三山や日本三景の地名なども刻まれており、巡拝地が多方面に及んでいることがわかります。

その他の石仏

道しるべ

現代の道しるべは、単に行き先を示す「物」でしかありませんが、江戸時代のそれは神や仏としての性格を持っていました。そのことは、道しるべの多くに地蔵菩薩や馬頭観音などが刻まれているのをみればわかります。

道しるべは本来、見ず知らずの旅人が、迷うことなく目的地へ到着できるようことの配慮から建てられたものです。それでは、自分たちの利益に無関係な道しるべを、なぜ村人は建てたのでしょうか。

私たちは、社会の中で互いに支えあって生きています。1人の人間がこの世を生きるには、今も昔も目にみえない多くの人々の力添えがあつてのことですが、当時はこれに加えて、神仏の加護が人の一生を大きく左右すると考えられていました。

決して楽な暮らし向きでなかった当時の農民が、大切な金銭を浄財として出し合つてまで道しるべを建てたのは、それが「人の道に^{かな}適う」と考えていたためと思われる。

63 道^{みち}しるべ



所在地 下奥富
 (旧道と赤間川通りの合流点)
 サイズ 高さ110cm 幅33cm

この道しるべは、下奥富^{しもおくたみ}の旧国道と赤間川^{あかまがわ}通りが合流する三差路^{さんさろ}にあり、寛政5年(1793)に造立されたものです。

左側面に「大山道」、右側面に「はんのふ(飯能)子ノごんげん(子ノ権現道)みち」とあるこの石塔は、正面に「南無阿弥陀仏」の名号が刻まれています。

この石塔は、僧侶と思われる寛善^{かんぜん}の発願により、下奥富村の村人が協力して建てたものです。彼らがこれを建てたのは、この世で

善を施すことが死後の極楽往生につながると思つていたためと思われる。

64 道みちしるべ



所在地
サイズ

柏原(東上宿バス停前)
高さ63cm 幅26cm
台座高さ60cm 台座幅38cm

この道しるべは、浮き彫りの馬頭観音を主尊とするもので、柏原の東上宿バス停前にあり、寛政8年(1796)に造立されたもので、「右大田ヶ谷」、「左坂戸道」とあります。

馬頭観音は、馬の守護仏として江戸時代には各地に建てられました。それは、馬が物資の運搬に重要な役割を果たしており、当時の村人の生活に密着していたためです。そのため、道しるべには交通の守り本尊として馬頭観音が刻まれるようになったのです。

65 道みちしるべ



所在地
サイズ

水野
(入曽多目的広場南バス停付近)
高さ59cm 幅24cm
台座高さ38cm 台座幅21cm

この道しるべは、丸彫りの地藏菩薩を主尊とするもので、水野の入曽多目的広場入口の十字路にあります。

弘化3年(1846)に建てられたこの石仏には、台座正面に「東新かし(新河岸)川ごへ(川越)道」、右側面に「扇町屋ミち」、左側面に「南ミかじま(三ヶ島)道」、裏面に「西青梅みたけ(御嶽)道」とあります。

これは個人の手で建てられたのですが、戒名が刻まれています。その理由は、道

を行き交う人々に善を施すことにより、今は亡き家族の菩提を弔うという造立者の気持ちの表れと考えられます。

66

だいろくてん
大六天



所在地
サイズ

柏原(本宿バス停付近)
高さ135cm
台座高さ36cm
幅41cm
台座幅44cm

この石塔は柏原(かしわばら)の本宿(もとじゅく)バス停付近(付近)にあり、安政6年(1859)に建てられたものです。

この大六天は俗に「ちらかしさま」と呼ばれ、周りを掃き清めたり片付けたりすると、たたりがあるとの伝説があります。

大六天は第六天(だいろくてん)とも書き、仏説(ぶつせつ)では欲界(よくかい)の最上に位置する天魔(てんま)で、他人の楽しみを自在に自分の楽しみに変える力を持つとされ、たりの多い神とされています。

(「伝説を伴う石仏(P56)」参照)

種子と真言について

「種子」とは、^{しゅじ}仏や菩薩などを像容で現す代わりとして、^{ぼんじ}梵字を組み合わせたものをいいます。

「真言」とは、^{しんごん}真理を語った言葉という意味で、梵字で標記されるのが一般的です。石仏に刻まれる代表的な種子と真言を掲げると、次のようになります。

胎藏界大日 ^ア ^{アーンク} ^バ ^{バインク} ^{バク} 釈迦 ^キ ^{キリーク} ^キ ^{キリーク} 阿弥陀 ^{パイ} 薬師

^キ ^{キリーク} ^カ ^カ 地藏 ^ウ ^{ウーン} 馬頭 ^イ ^イ ^イ ^イ ^イ ^イ 六地藏

光明真言

オン
ア
ボ
キャ
ベイ
ロ
シャ
ノウ
マ
カー
ボ
ダ
ラ
マ
ニ
ハン
ド
マ
ジン
バ
ラ
ハ
ラ
バ
リ
タ
ヤ
ウ
ン
(終
止
符)

印相について

印相とは、如来などの諸仏が、両手の指を組み合わることにより、宗教上の理念を表現することをいいます。

ここでは、石仏でよくみられる代表的な印相を紹介します。

ちけんいん
【智拳印】



左手の人差し指を右手で握るもので、「智」を表し、考える形です。金剛界大日如来が結ぶ印です。

ほっかいじょういん
【法界定印】



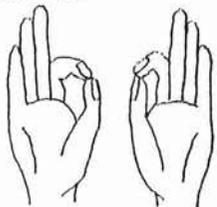
左手の掌の上に右手を重ね、親指をつけるもので、「理」を表し、悟りの境地を示します。胎藏界大日如来が結ぶ印ですが、釈迦如来が結ぶと禪定印、薬師如来が結ぶと薬壺印となります。

みだじょういん
【弥陀定印】



阿弥陀如来が結ぶ印で、両手の指を組み、親指と人差し指で輪を作るもので、真理に達する姿を示します。座像の阿弥陀如来によくみられます。

せっぽういん
【説法印】



阿弥陀如来が結ぶ印で、両手の親指と人差し指で輪を作って掌を外へ向けたもので、説法する形を示します。立像の阿弥陀如来によくみられます。

てんぽうりんりん
【転法輪印】



説法印のひとつで、右手は親指と人差し指で輪を作って掌を外に向け、左手は親指と中指で輪を作って掌を上へ向けます。阿弥陀如来や釈迦如来にみられます。

らいごういん
【来迎印】



阿弥陀如来が結ぶ印で、右手は上に、左手は下に向け、親指と人差し指で輪を作るもので、死者を迎える形を示します。

せむいん
【施無畏印】



右手を挙げて指を伸ばし掌を開いた形で、すべての恐れを取り除き、衆生に安心を与える印です。

よがんいん
【与願印】



左手を下げて指を伸ばし掌を開いた形で、衆生の願いを施し与える印です。聖観音では、右手を下げて与願印とします。

がっしょういん
【合掌印】



両手を合わせた形で、地藏菩薩や阿弥陀三尊の脇侍の勢至菩薩などが結ぶ印です。

みょうおうばこういん
【明王馬口印】



馬頭観音が結ぶ印です。

げ 偈について

「偈」とは、仏教の経典などにある仏を称える言葉を、詩の形に整えたものです。その種類は100種とも200種ともいわれていますが、石仏に多く刻まれるものを掲げると、次のようになります。

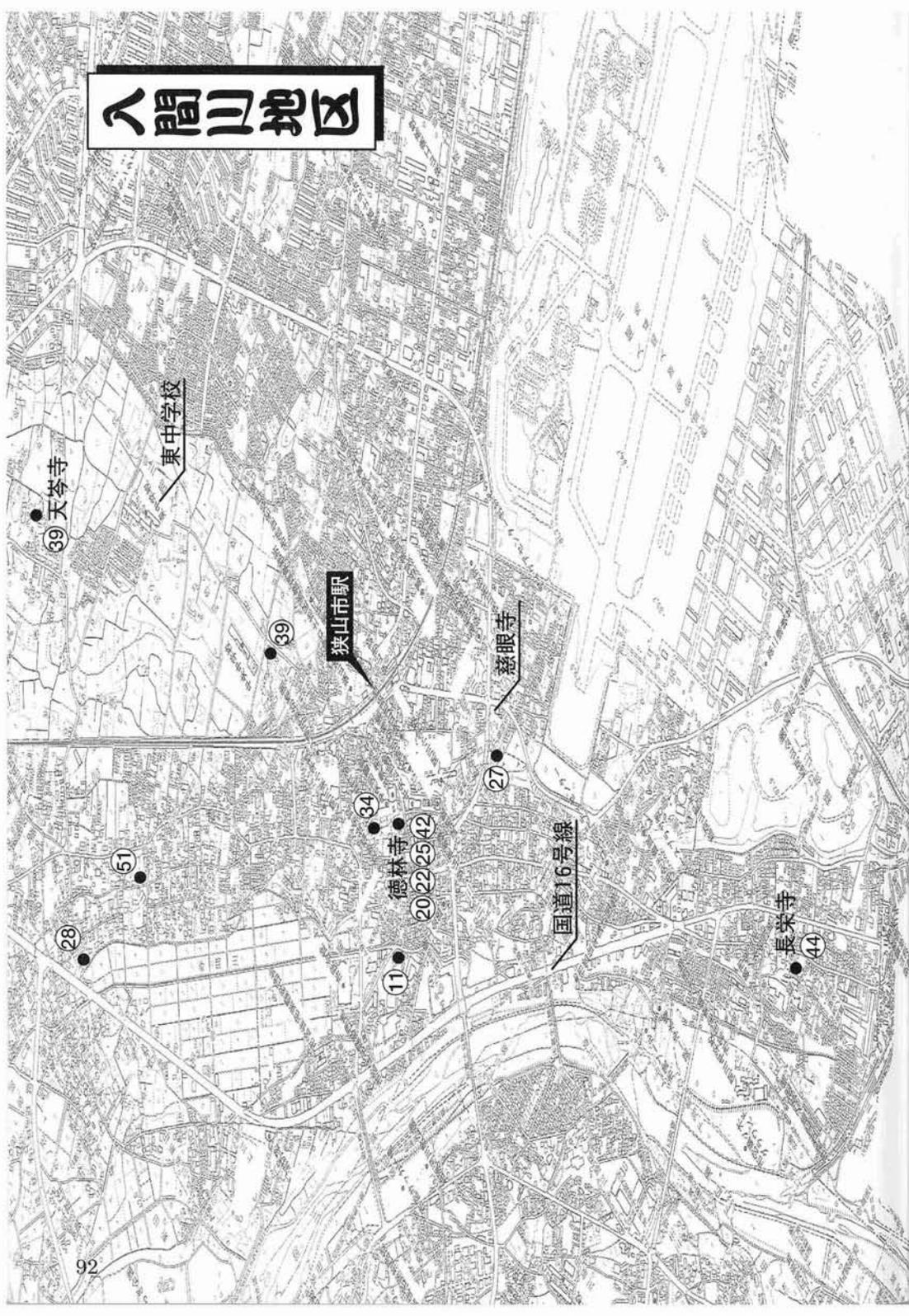
- ① 光明遍照 十方世界 念仏衆生 撰取不捨 (観無量寿経)
- ② 諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅為楽 (涅槃経)
- ③ 今此三界 皆是我有 其中衆生 悉此吾子 (法華経譬諭品)
- ④ 一念弥陀仏 即滅無量罪 現受無比楽 後生清浄土
(観世音菩薩往生浄土本縁経)
- ⑤ 十方仏土中 唯一乘法 無二亦無三 除仏方便説 (法華経方便品)
- ⑥ 願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道 (法華経化城諭品)
- ⑦ 願以此功德 平等於一切 同発菩提心 往生安楽国 (観無量寿経疏)
- ⑧ 設我得仏 十方衆生 至心信衆 欲生我国 乃至十念 若不生者
不取正覚 (無量寿経・上)
- ⑨ 毎日晨朝入諸定 入諸地獄令離苦 無仏世界度衆生 今生後世能引導
(仏説延命地藏菩薩経)

【参考文献】

- 狭山市編『狭山市史』民俗編(昭和60年3月)
坂戸市教育委員会編『坂戸市史』民俗史料編・石造遺物(昭和58年2月)
庚申懇話会編『日本石仏事典』(平成2年6月・雄山閣出版)
日下部朝一郎著『石仏入門』(昭和53年8月・国書刊行会)
中村瑞隆・石村喜英・三友健容編著『梵字事典』(平成5年10月・雄山閣出版)
狭山市立博物館常設展示物『狭山の絵本』(平成3年11月)

石 仏 地 図

入間山地区



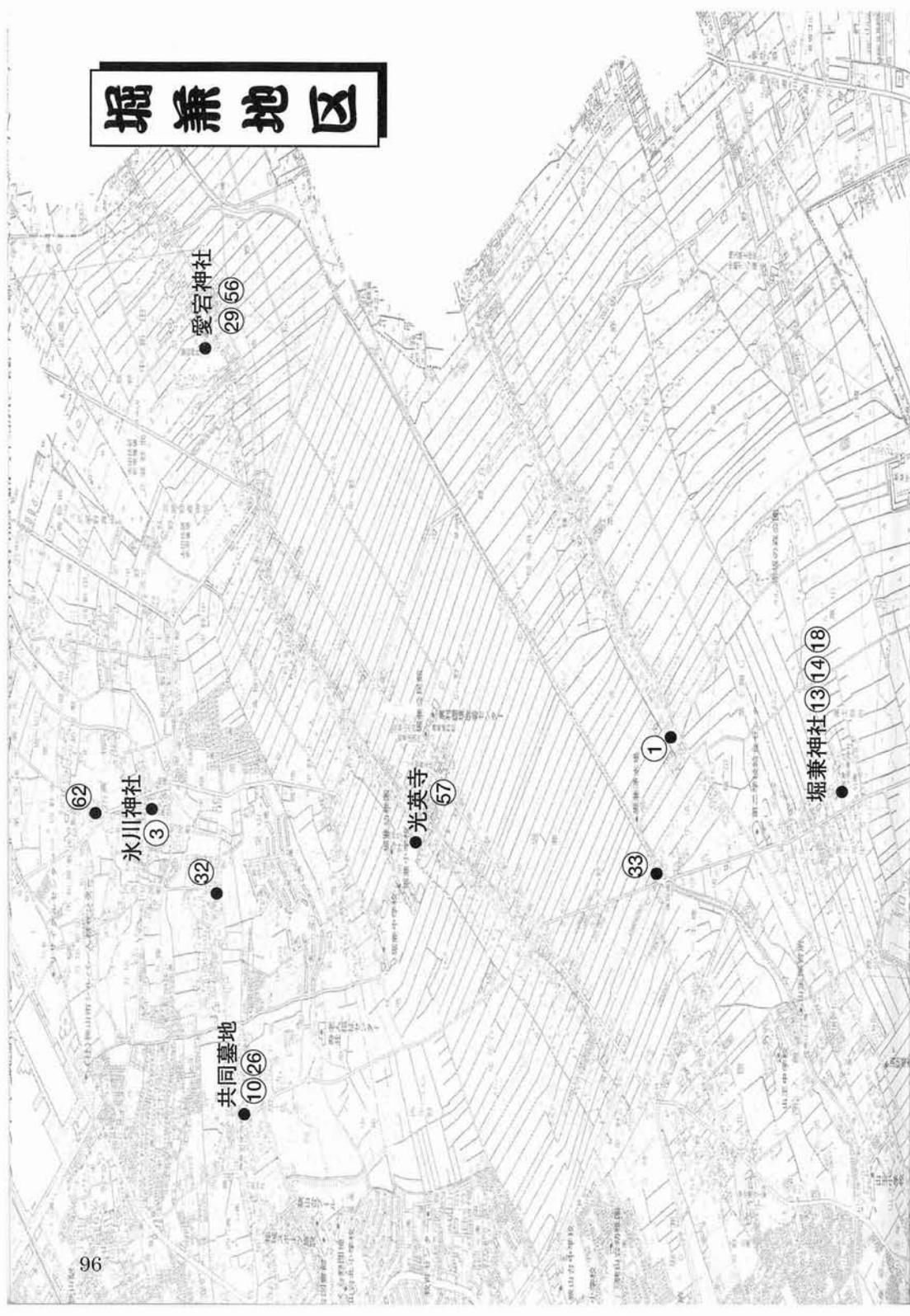
種 別	所 在 地	造 立 年	写 真
○塞 ぎ			
石橋供養塔(浮彫馬頭観音)	入間川2(菅1自治会館脇)	安永10年	写真11
○現当二世安楽の供養塔			
釈迦如来	入間川2(徳林寺墓地)	宝永6年	写真20
薬師如来	入間川2(徳林寺墓地)	宝永6年	写真22
地藏菩薩	入間川2(徳林寺内、穴あき石を奉納)	元禄6年	写真25
地藏菩薩	入間川1(慈眼寺裏、黒くなつた地藏)	元禄15年	写真27
地藏菩薩	狭山(田中共同墓地、カンカン地藏)	宝永5年	写真28
馬頭観音	入間川2(福徳院内)	寛保元年	写真34
馬頭観音(文字塔)	祇園(三軒屋墓地)	年不明	写真39
聖観音	沢(天岑寺内)	年不明	写真40
七観音	入間川2(徳林寺内)	寛政5年	写真42
○經典供養塔			
大乘經典読誦供養塔(文字塔)	鶴ノ木(長栄寺墓地)	宝永6年	写真44
大乘經典読誦供養塔(阿弥陀如来)	沢(天岑寺内)	文化9年	写真45
写経供養塔(如意輪観音)	狭山(消防小屋裏墓地)	安永2年	写真51

入間地区



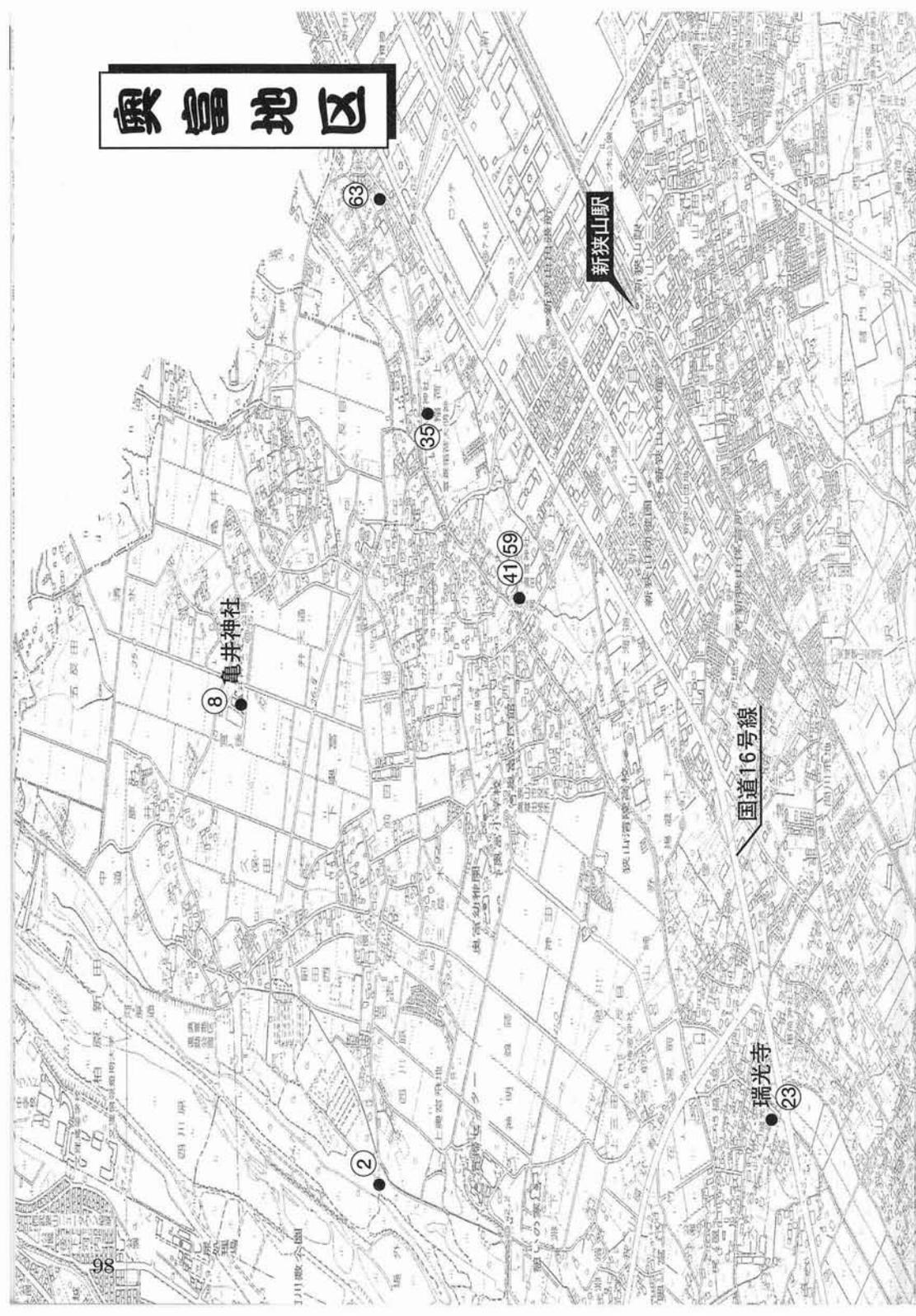
種別	所在地	造立年	写真
○生産神			
出羽三山供養塔	南入曽(金剛院内)	文政11年	写真5
日待供養塔(浮彫地藏菩薩)	南入曽(金剛院内)	元禄6年	写真6
○塞ぎ			
三界万霊供養塔	北入曽(常泉寺墓地)	元禄3年	写真9
敷石供養塔	南入曽(金剛院内)	天保3年	写真12
○現当二世安樂の供養塔			
庚申塔(青面金剛)	南入曽(金剛院内)	天明2年	写真15
庚申塔(青面金剛)	水野(天理教教会付近)	天明2年	写真16
庚申塔(文字塔)	水野(水野郵便局付近)	元治元年	写真19
地藏菩薩	水野(下水野児童公園付近、化け地藏)	貞享2年	写真24
馬頭観音(文字塔)	水野(山王小学校正門付近)	明治18年	写真37
馬頭観音(文字塔)	南入曽(中央霊園)	寛政11年	写真38
○經典供養塔			
光明真言読誦供養塔(大日如来)	南入曽(金剛院裏)	文久2年	写真50
○巡拝供養塔			
回国供養塔(文字塔)	南入曽(電車基地北側墓地)	寛政10年	写真60
観音霊場巡拝供養塔(文字塔)	南入曽(金剛院内)	寛政7年	写真61
○その他の石仏			
道しるべ(丸彫地藏菩薩)	水野(入曽多目的広場南バス停付近)	弘化3年	写真65

堀兼地区



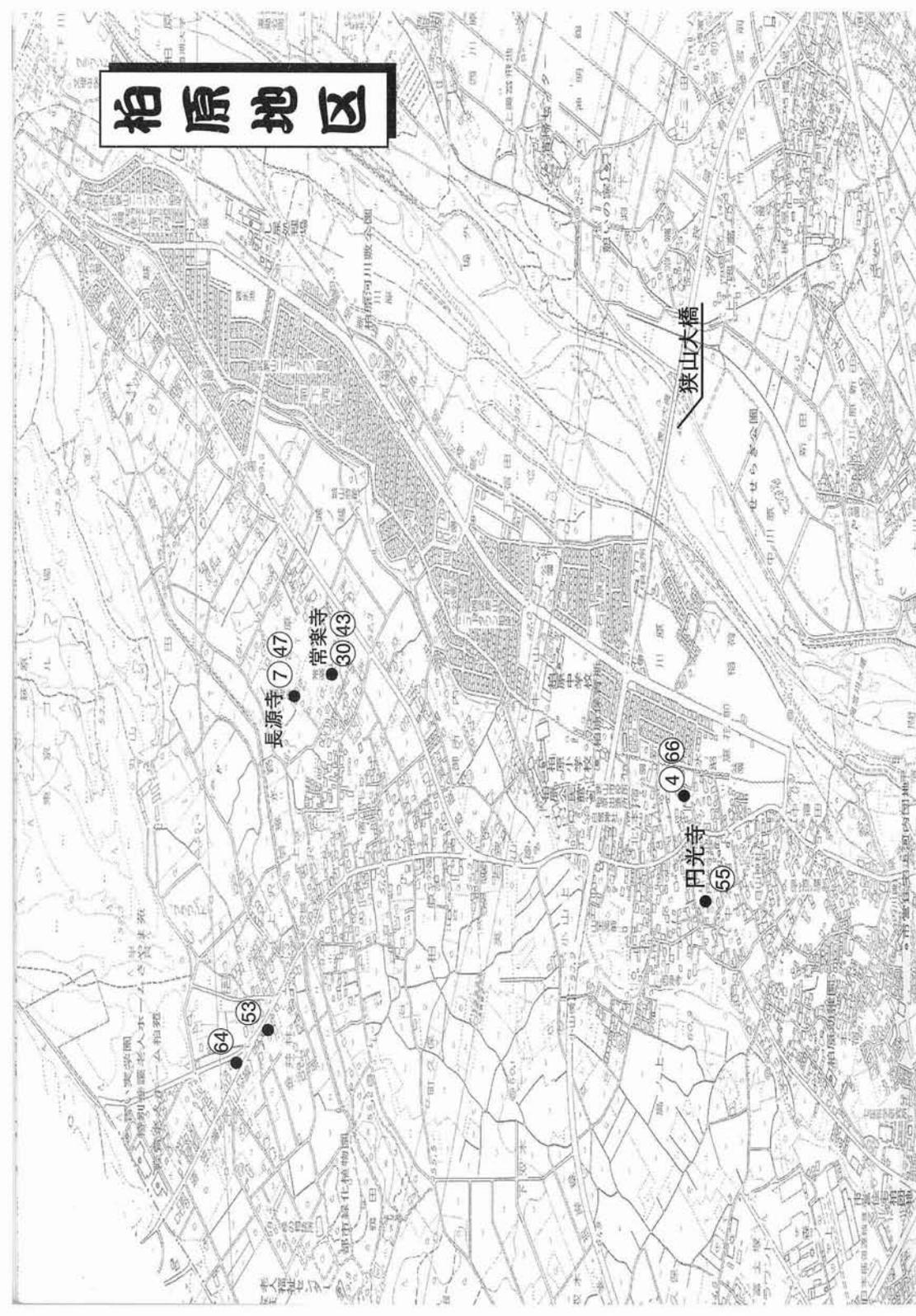
種別	所在地	造立年	写真
○生産神	上赤坂(給食センター近くの堀兼境) 青柳(氷川神社内)	元禄13年	写真1
弁財天		明治10年	写真3
富士信仰碑		安永10年	写真10
○塞ぎ		寛文9年	写真13
石橋供養塔(地藏菩薩)		延宝5年	写真14
○現当二世安楽の供養塔		安永10年	写真18
庚申塔(三猿塔)		元禄7年	写真26
庚申塔(三猿塔)		正徳5年	写真29
庚申塔(文字塔)		享保14年	写真32
地藏菩薩		元文5年	写真33
地藏菩薩		宝永7年	写真56
馬頭観音		享保12年	写真57
馬頭観音		明治26年	写真62
○經典供養塔	加佐志(共同墓地)		
寒念仏供養塔(浮彫地藏菩薩)		堀兼(堀兼神社内)	
百万遍念仏供養塔(文字塔)		堀兼(堀兼神社内)	
○巡拝供養塔		堀兼(堀兼神社内)	
観音霊場巡拝供養塔	加佐志(共同墓地、耳だれ地藏)		
	中新田(愛宕神社内)		
	青柳(鳴を刻む)		
	堀兼(権現橋脇)		
	中新田(愛宕神社内)		
	堀兼(光英寺内)		
	青柳(新屋敷バス停付近三差路)		

奥富地区



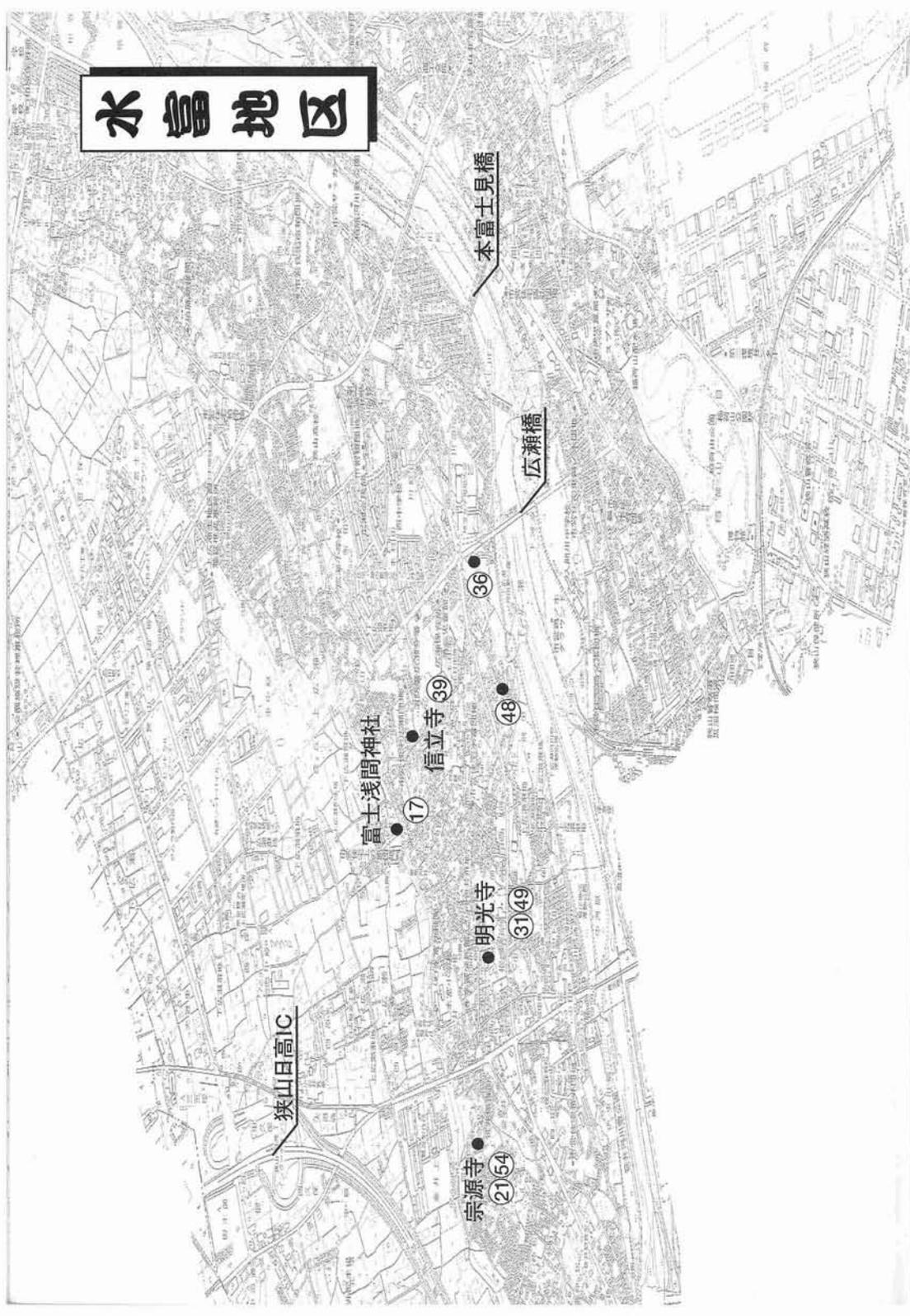
種別	所在地	造立年	写真
九頭龍大権現 蚕神(蚕影山大権現) ○ 現当二世安楽の供養塔 大日如来 馬頭観音 如意輪観音 ○ 経典供養塔 念仏供養塔(浮彫地藏菩薩) 念仏供養塔(浮彫聖観音) ○ 巡拝供養塔 回国供養塔(文字塔) ○ その他の石仏 道しるべ(文字塔)	下奥富(前田集落の堤防下)	嘉永 3年	写真2
	下奥富(亀井神社内)	文政13年	写真8
	上奥富(瑞光寺内)	享和 2年	写真23
	下奥富(八雲神社付近、イボ神様)	安永 8年	写真35
	下奥富(西方自治会館裏)	正徳 6年	写真41
	下奥富 広福寺墓地(現存せず)	寛文13年	写真52
	下奥富 広福寺墓地(現存せず)	延宝 元年	写真58
	下奥富(西方自治会館裏)	享保 3年	写真59
	下奥富(旧道と赤間川通りの合流点)	寛政 5年	写真63

柏原地区



種 別	所 在 地	造立年	写真
○生産神 大山灯籠	柏原(本宿バス停付近)	文政13年	写真4
月待供養塔	柏原(長源寺内)	天保 7年	写真7
○現当二世安楽の供養塔	柏原(常楽寺内)	宝暦 7年	写真30
地藏菩薩(半跏座)	柏原(常楽寺内)	天保15年	写真43
七観音	柏原(長源寺内)	慶応 元年	写真47
○經典供養塔	柏原(東上宿バス停付近)	元禄 4年	写真53
普門品読誦供養塔(文字塔)	柏原(円光寺内、耳の石仏さま)	寛延 2年	写真55
念仏供養塔(浮彫地藏菩薩)	柏原(東上宿バス停前)	寛政 8年	写真64
六斎念仏供養塔(半跏座地藏菩薩)	柏原(本宿バス停付近、大六天さま)	安政 6年	写真66
○その他の石仏 道しるべ(浮彫馬頭観音)			
大六天			

水富地区



種 別	所 在 地	造立年	写真
○ 現当二世安楽の供養塔 庚申塔 阿弥陀如来	上広瀬(富士浅間神社内) 笹井(宗源寺内)	寛政11年 寛文13年	写真17 写真21
丸彫六地藏 馬頭観音(文字塔)	根岸(明光寺内) 下広瀬 (ヤオコー前の墓地、ひぐらし馬頭さん)	天明 3年	写真31
○ 經典供養塔 大乘妙典読誦供養塔(文字塔) 普門品読誦供養塔(文字塔) 大般若経読誦供養塔(文字塔) 念仏供養塔(浮彫地藏菩薩)	上広瀬(信立寺参道入口) 下広瀬 根岸(明光寺内) 笹井(宗源寺内)	文政13年 寛政 6年 慶応 2年 享保14年 享保 4年	写真36 写真46 写真48 写真49 写真54

あとがき

足の向くまま気の向くままに市内を散歩すると、寺院の入口や四つ辻などで石造のお地藏さまや馬頭観音さまに出会うことがあります。これらはふつう「石仏」と呼ばれていますが、なかには庚申塔や水神など、「石神」としての性格を持つものもあります。

狭山市内には700基余りの石仏がありますが、このうち造立年がわかっているのは603基です。その多くは地藏菩薩や馬頭観音・庚申塔ですが、なかには念仏講と呼ばれる同信者の集団によって建てられた供養塔や観音霊場を巡拝した記念に建てたもの、また、街道を往来する旅人の便を図るための道しるべなどその種類は多岐に及びます。

これらの石仏は、江戸時代から明治時代にかけて、その大多数が農民の手により造立されていますが、彼らが石仏を建てたのは目的があつてのことです。その目的は、農作物のげんとう豊かな実りを願うものであったり、安産や病気平癒など多種多様ですが、根本には「現当二世安楽」つまり「この世とあの世」の二世にわたり、幸せに暮らせることを願うという信仰心から出たものといえます。言い換えれば市内の石仏は、農民の生活の中から生まれ出たものなのです。

このたび開催する写真展「狭山の石仏 '99」は、こうした路傍の石仏に焦点を当て、それを信仰面から分類し、代表的なものを展示することとしました。この中には、残念ながらすでに失われたものもあります。20世紀も終わりに近づいた今日、多数の皆様方にご観覧いただき、石仏に対する関心が少しでも深まれば幸いです。

(企画展「写真展 狭山の石仏 '99」—開催にあたって—より)

市内の石仏をカラー写真で展示した企画展「狭山の石仏 '99」は、好評のうちに終了しました。その後、市内外の多くの皆様から図録や写真集の発行を望む声を沢山頂戴いたしました。そこで、博物館では、21世紀のスタートの年に新たな気持ちで『狭山の石仏』と題した本書を編みました。

「狭山の石仏 '99」の展示をベースとして、図録と写真集の性格を兼ね備えた内容になっております。さらに、地区別の石仏地図を新たに付け大きさもコンパクトにしましたので、散歩のお供として携えていただければ路傍の石仏のガイドブックとしてもご利用いただけます。そして、この小さな本から、過去の人々のさまざまな思いを感じていただけたら幸いに存じます。

最後になりましたが、巻頭の詩「草」及び挿絵、それぞれの掲載をご快諾いただきました、共に本市在住の詩人の吉野弘氏、童画家の池原昭治氏に対し、心より感謝申し上げます。

平成13年3月

狭山市立博物館

狭山の石仏

平成13年(2001年)3月30日発行

編集・発行 狭山市立博物館

〒350-1324

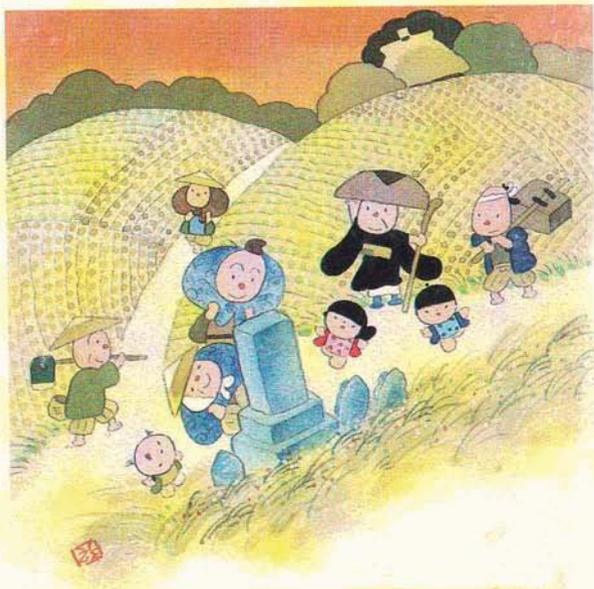
埼玉県狭山市稲荷山1-23-1稲荷山公園内

TEL 042-955-3804

印刷所 エンジェル印刷株式会社

埼玉県狭山市水野507-1

 本文は古紙配合率100%の再生紙を使用しております。



【ひぐらし馬頭さん】(柏原) P76掲載

狭山の石仏

生産神

塞ぎ

現当二世安楽の供養塔

経典供養塔

巡拝供養塔

その他の石仏



【大六天さま】(柏原) P56掲載

(イラスト：池原昭治)

『狭山の石仏』付録

狭
山の石仏
銘文集

〔写真1〕

元禄十三年辰ノ十一月吉日

(正) (弁財天座像)

十五童子

落合市郎左衛門

為二世安樂

ほか一二名

武州入間郡上赤坂村

(台座)

(正)

此道大目

左ハ武蔵野

所沢

これより中山

はんのう

〔写真2〕

(正) 嘉永三年次庚戌十二月

九頭龍大権現

法橋□□

(裏) 願主 小島弥五兵衛

〔写真3〕

〔正〕富士嶽神社

〔裏〕村内五穀豊登

明治第十星舎丁丑八月中旬建焉

庚寅六月吉日

奉禮司 豊人 謹興

〔五〕文苑十三平口口

〔写真4〕

〔写真 4〕

(正) 文政十三年□□

奉納石尊大権現

庚寅六月吉日

組花恵

御清奉十尾舎下丹八月申日

(裏) 林内正徳寺

(五) 倉上殿

一五頁

〔写真5〕

(正)

羽黒

種子 湯殿山 三山供養塔

月山

(右)

西国

種子 坂東百番供養塔

(正) 順

礼

(左)

秩父

富士

種子 浅間三山供養塔

立山

(台座)

(右) 武州入間郡水野村

宮岡惣左衛門

ほか八名

(左) 沢田勝右衛門

ほか九名

(裏)

開眼導師

文政十一戊子年二月吉祥日 御嶽山主

法印寛澄

水野忠助

〔写真 6〕

施主 栗原弥左衛門

宮野八兵衛

大野正兵衛

斎藤六郎左衛門

浅野七平

斎藤得右衛門

□□久右衛門

□島小左衛門

奉造立日待供養

(正)
(地藏菩薩立像)

元禄六癸酉天十一月□□日

〔写真7〕

〔正〕

二十三夜塔

徳大勢至菩薩

石橋十一ヶ所建之

〔右〕天保七丙申年四月吉日

〔左〕当村

施主 沼崎彦右衛門

〔式〕 願主 兼中

四月吉日

〔式〕 文殊十三夜真像

〔五〕 香積山大辯殿

〔三〕 裏山

〔写真 8〕

〔正〕 蚕影山大権現

〔右〕 文政十三庚寅歳

四月吉祥日

〔左〕 願主 講中

〔写真9〕

①

元禄

種子 (石幢六地藏立像)

奉再建之

常泉寺

現住隆寛

②

三歲

種子 枳里地藏尊

有縁無縁

③

庚午

種子 天月地藏尊

法界万靈

④

現住

種子 人福地藏尊

施主 当村中

⑤

教海

種子 書衣地藏尊

世話人

吉右衛門

五左衛門

善右衛門

⑥

建立

種子 天華地藏尊

乃至法界

平等利益

〔写真10〕

〔正〕安永十丑歲

石橋供艱

〔正〕〔地蔵菩薩立像〕

二月吉日

〔台座〕

〔右〕

得性

願主

風下村中

〔写真 11〕

(正) (馬頭觀音座像) 石橋供養塔

(右) 安永十辛丑年

三月吉祥日

(左) 入間郡入間川村

講中 願主行者

小沢忠右衛門

(五) 蓮台地蔵尊

(五) 猿

美

水裡豊吉

栗原新古衛門

吉裡吉只衛

(古) 成代

小沢

(古) 念山

栗原新古衛門

〔写真 12〕

(正) 敷石供養塔

(右) 天保三壬辰年六月吉祥日

庄屋

水野忠助

(左) 助力

近村中

(正) 発願

義順

水野豊吉

栗原清右衛門

吉野佐兵衛

座)

(台 (右) 助力

小沢□□□□ ほか七名

斎日講中

(左) 念仏講中

栗原辰五郎 ほか八名

〔写真 13〕

皆寛文九己酉年

施主 仏心坊

(正) 奉供養庚申待結集□ (三猿)

小沢平左衛門尉

霜月朔日

敬白 ほか一〇名

日二月十三日

月水一八名

(五) (三猿)

五五五五

田中丁式衛門

(写真 13)

〔写真14〕

延宝五年

田中仁左衛門

(正) (三猿)

巳二月十三日

ほか一八名

〔写真15〕

(正) (青面金剛立像)

(右) 唯願本尊青面金剛四帝夜叉諸眷属等

降臨此処永安鎮座聖朝安穩天長地久

国土泰平万民豊樂令法久住利益有情

信心願主助成壇那衆病悉除身心安樂

壽命長遠恒受快樂及以法界平等利益

(左) 天明二壬寅歲二月吉日 願主 当村中

名主 小野田良右衛門

御嶽山金剛院寛慶代

(座 台)

(四夜叉像)

〔写真 16〕

〔正〕（青面金剛立像）

〔右〕

開眼尊師

御嶽山金剛院法印寬慶

維持天明二壬寅年□月吉日

淳覚庵主春海代

発願 水野氏寛伴

〔左〕奉安座尊像

施主当村中

当処転禍為 大小善男女

福衆病悉除

身心安樂之

御祈願敬白

〔写真17〕

(正)

中村惣

(右)

斎藤喜左衛門

ほか一七名

(左)

清水吉次郎

ほか一五名

(台座)

(裏)

武州高麗郡上広瀬村

寛政十一未十二月吉日

正学院

講

下郷

岸庄右衛門 中

ほか二名

(正)

(青面金剛立像)

(五)

厨子 奥中書

寛永十一年丑四月日

〔写真18〕

〔写真 18〕

安永十辛丑四月日

(正)

種子 庚申碑

(五) (背) 金剛立碑

(組合)

(一) 短形高麗器土刀

寛政十一年十一月廿日

(二) 筒水吉火細

引水一丁合

(三) 長形高麗器土刀

五

〔写真 19〕

(正) (三猿)

(正) 庚申塔

(右) 此方

(右) 元治元甲子歳

座)

青梅道

九月吉日

御嶽山道

(左) 水野村

(台) (左) 此方

願主

宮岡伊左衛門

三ヶ島道

山口観音みち

(裏)

干御定本六月廿五日

(五) (原盛瓜来立鏡)

(三) (真 05)

〔写真 20〕

(正) (釈迦如来立像)

(裏)

于時宝永六己丑年

武州入間郡入間川村福聚山徳林禅寺現住法山格雲叟安置之者也

霜月吉祥日

〔写真 21〕

水村将監

野田市右衛門

武井七□□

藤倉□□□衛門

野田□□□

相□又右衛門

藤倉□□衛門

田村□左衛門

田中七□左衛門

堀江□兵□

(正) 奉造立

(阿弥陀如来立像)

寛文十三癸丑天二月八日

願主

海州入間郡入間川村藤原山崎村野田吉良村

干利定米六百五十石

(五) (奉造立像)

(写真 22)

〔写真 22〕

(正) (薬師如来立像)

(裏)

于時宝永六己丑年

武州入間郡入間川村福聚山徳林禅寺現住法山格雲叟安置之者也

霜月吉祥日

(五)

(同) 佛如来立像

南無西代福聚山果阿寺

佛出□□□

九式□□□

佛出□□□

佛出□□□

(正) 厥□胎藏毘盧尊者当山

二十二世俊儀存世日建

我碑冠其上也雖然随歷

星霜為烈風震動斜而怒

其顛倒故予師当□二十

四世辰祐逐調莖礙而分

安此上也予熟思無其銘

則歎后世没兩師之志乃

于越恭記之而已

見瑞光密寺廿六世祐海

(左) 享和二壬戌歲

七月吉辰記之

(正)

(大日如来座像)

(台 座)

〔写真 24〕

宇佐美半太夫

ほか二二名

武州入間郡水野村

(正) 種子 (地蔵菩薩立像)

貞享二乙丑年

一月十五日

牛久保忠元

ほか二四名

(裏) (台)

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including names like 牛久保忠元 and dates like 貞享二乙丑年）

〔写真 25〕

(正) (地藏菩薩立像)

(右) 尔時元禄六癸酉稔

(左) 二月廿四日

入間川郷

(裏)

種子 大阿闍梨権大僧都法印

龍 □ 辰惠 □ 白

(台 座)

(正) 六濟日

七十一人

惣郷中

〔写真 26〕

奉造立為念仏六齋日衆中二世安樂也

敬主

(正) (地藏菩薩立像)

元祿七戌天八月吉日 武州入間郡風下村

〔写真 27〕

(正) (地蔵菩薩立像)

(右) 我等与衆生

皆共成仏道

(左) 願以此功德

普及於一切

(裏) 元禄十五壬午年

奉造立地蔵大菩薩

霜月廿四日

(台座)

(正)

右 藤沢道
左 江戸道

入間川村

村惣檀中

〔写真 28〕

(正) (地藏菩薩立像)

(右)

施主

皆宝永五戊子天八月廿四日

法印念誉円海

(左) 武州入間郡田中村

(裏) 奉□ (以下摩滅により文字数不明)

〔写真29〕

正徳五年乙未十二月一日

(正) (地藏菩薩座像)

中新田

(五) (地藏菩薩半跏趺坐像)

(台座)

(正)

五月童子九月廿三日

ほか九名の戒名

(台)

(五) 胡式岩林中

今世為世諸陀尊

無心世界寶樂主

入權似煖合銷苦

(五) 並日鼻時人壽家

(正) (地藏菩薩半跏趺座像)

(正) 每日晨朝入諸定

入諸地獄令離苦

無仏世界度衆生

今世後世能引導

(右) 助力当村中

乃至法界平等利潤

宝曆七丁丑十一月吉祥日

(左) 願主 六齋日善女人中

武州高麗郡柏原村

妙法山常樂寺住典美代建

①

(正) (地藏菩薩立像)

(台座)

(正) 金剛願地藏

②

(正) (地藏菩薩立像)

(台座)

(正) 金剛幢地藏

③

(正) (地藏菩薩立像)

(台座)

(正) 鶏龜地藏

根岸村中

并近村中

天明三癸卯天

④

(正) (地藏菩薩立像)

(台座)

(正) 法性地蔵

三月吉祥日

⑤

(正)

(地蔵菩薩立像)

願主斎日講中

⑥

(正)

(地蔵菩薩立像)

(台座)

(正)

地持地蔵

天國信男女

井当村中

(台座)

(正)

宝性地蔵

惣旦中

〔写真 32〕

龕

発菩提 武州入間郡

(正) (馬頭観音立像)

施主

享保十四己酉年三月日 奥富氏 青柳村丸山

(五) (馬頭観音立像)

施主

示文式典申平八日吉日 辯山丸

武次掛首 御座 御立之 願葉付

(写真 33)

〔写真 33〕

為先祖有緣聖靈追建立之 堀兼村

〔正〕 (馬頭觀音立像)

願主

元文五庚申年九月吉日

横山氏

(正) 寛保元辛酉年

奉造立馬頭觀世音□尊

五月吉祥日

(正) (馬頭觀音座像)

(台 座)

(右) 乃至法界

平等利益

(左) 武蔵国入間郡

入間川惣村中

(式) 藏主 藤田村口南門

安永八日交拜五日廿三日

(式) 訂立せさく志を訂て野六心曲

(五) 尊子 (馬頭觀音立像)

〔写真 35〕

〔写真 35〕

(正) 種子 (馬頭観音立像)

(右) によせちく志うほつばたい也

安永八己亥年正月廿三日

(左) 施主 細田林右衛門

(五) (馬頭観音立像)

(親 台)

(六) 八子若果

(七) 筑前國八幡郡

平幸麻益

百目寺村日

幸直立河原國州門

山

〔写真 36〕

(正) 馬頭觀世音

(右) 文政十三年歲次

庚寅正月吉祥日

(式) 川合平五郎

八月吉日

觀音觀世音

(五) 即位十八平

〔写真 36〕

(台 座)

(正)

中 邨 総

(右) 高麗郡加治

領霞之郷

両広瀬村

〔写真 37〕

(正) 明治十八年

馬頭觀世音

八月吉日

(左) 川合平五郎

奥書五頁

(注) 文種十三平箱式

(五) 馬頭觀世音

〔五頁〕

南山齋

馬頭觀世音

(五) 馬頭觀世音

馬頭觀世音

〔写真 38〕

〔正〕種子 馬頭明王

〔右〕寛政十一己未天正月吉祥日

開眼師金剛院

法印寛晃

〔左〕武州入間郡南入曾村

願主 橋本与次右衛門

〔五〕武州入間郡南入曾村

〔五〕武州入間郡南入曾村

〔写真 39〕

〔正〕馬頭觀世音

頭主 繪本七代目繪師

〔五〕新撰人辯證南人曾林

志田寛景

福地福金藏

〔四〕新撰十人本入五尺三寸

〔五〕新撰八尺四寸

〔一〕新撰

〔写真40〕

(正) (聖觀音立像)

(五) (聖觀音立像半部)

(写真41)

(合)

普□箱出

以□箱出

(五) 五輪六丙申平

〔写真41〕

（正）（如意輪觀音半跏趺座像）

（台 座）

（正）正徳六丙申年

以斯功德

普□群生

〔写真42〕 *右から

①

(正) (如意輪観音半跏趺座像)

(正) 施主

入間川惣檀中

(台) (右) 寛政五丑年

七月吉日

②

(正) 施主

峯村旦中

市場旦中

川原新田

入間川

惣村中

斎日講中

(台 座)

(右)

願主

現貫中代

□外□午

戒水妙□

寛政五丑

七月日

(正) (聖観音座像)

(五) (十一面観音座像)

③

(正) (十一面觀音座像)

(正) 施主

綿貫五郎兵衛

座)

ほか五名

(台 (左)

久輪信士

ほか五名の戒名

貫中代

④

(正) 施主

綿貫半平

(正) (千手觀音座像)

(台 座)

(左) 寛政五丑年

七月吉日

貞

為

先祖代々精靈

⑤

(正)

(准胝觀音座像)

(正) 施主

中島利八母

助力

甲田弥左衛門

小林久右衛門

(台座)

(左)

寛政五丑年

七月日

秀光□明□

当寺現□

貫中代

⑥

(正)

(馬頭觀音座像)

(正) 施主

小川清七母

ほか七名

(左)

流泉信士

花香信士

寛政五丑天

七月日

現貫中代

⑦

(正)

(不空羅索觀音座像)

(正) 施主

伏川源右衛門母

(左) 寛政五丑年

七月七日

白 □ □ □ □ □

□ □ □ □ □

貫中代

〔写真 43〕

(正) (千手座像)

(馬頭座像)

(聖座像)

(准胝座像)

(十一面座像)

(如意輪半跏趺座像)

(楊柳座像)

(右) 天保十五甲辰年二月吉日

(左) 最日講中

世話人 沼崎彦右衛門

〔写真44〕

(正)

宝永六己丑天 武州入間郡鵜木村

種子 奉誦誦大乘妙典一千部諸願成就処

三月如意日 施主 水越忠兵衛

(右)

凡思逆修善根者源出金□梵音七分全得元示如来教仍賢愚均修之□
素同当之因茲施主空山道清居士安一生幻夢之報命欣來世長時之安
樂柚經王千部誦誦之誠驚鵜主喬聽之耳若□実相惠日朗衆業悉如霜
露銷□頓梵風頻扇 德香如芝蘭薰無縁慈雲覆法界耳露法雨普麗聞
種子令 殖心性大□發心芽莖世世生養觀行枝葉生々增長三学夢開
發真因園三菩提莫使結大覺尅給冀自他証無上仏果而已

(左)

央春朔華含樹頭鮮色示真如宝相之妙理秋夕月耀晴天新光顯寂靜法
住空理然則三世諸仏雖説教区也悉無非為衆生成仏十方薩埵雖化尊
品色皆為濟度利生因茲大小半滿教法間無通一乘醍醐偏円權実諸經
中無超妙法之經王奥施主武州入間郡鵜木村之住水越忠兵衛□多年
尽心祖父并為先考先妣菩提兼而者自身欣求淨□之誦誦法華經一千

部六万九千三百八十四字之真文今新造立生仏一如之功德聚刷供仏施僧梵筵挿追福修善懇志資拔苦与禾妙味者也凡此經者三世諸仏出世之木懷一切衆生成仏之直道

(裏)

世依之經若有聞法者無一不成仏或者又須叟聞之即得究意付耨□羅二藐三菩提文如是依妙典誦誦之勲功□忠之靈魂速去六趣旨□□滿出離生死願望建成等正覺大□到極□浄土之宝処者也 乃至法界平等利益 敬白

念仏百万遍光明真言百万遍 施主 奉所作者也

(正) 大乘妙典千部供養塔

(右) 願以此功德

普及於一切

我等与衆生

皆共成仏道

(左) 実相妙法離文字

蠢動含靈自己心

転転住他迷悟類

非経非仏闕追尋

(裏) 文化九壬申載四月穀日

当寺十四世大珠仙昶叟

(正) (阿弥陀如来座像)

(台 座)

〔写真 46〕

(正) 南無妙法蓮華經法界

(右) 安永五歲丙申四月日 功德主題目講中

(左) 惺按山信立寺二十世大乘院日真造營

〔写真47〕

〔正〕 普門品供養

〔正〕

連經講

（台 座）

〔左〕

慶応元乙丑歳

九月吉日

長源寺

曹瑞代建之

〔写真 48〕

(正) □ 願主

□ 下郷

(正) 普門品

供養塔

□ 十五人

一万卷

□ 上郷

(右) 天下泰平

五人

百稼成実

助力

(台 座)

(左) 慶応二丙寅年春二月

惣邨中

(右) 高麗郡霞郷

広瀬村

〔写真49〕

〔正〕

天下泰平 享保十四年

種子

奉納大般若經六百卷所

国土安全 己酉五月吉日

〔右〕

種子

一方貴賤檀越等

善巧方便遍法界

般若全部悉成弁

所修一切衆善業

利益一切衆生故

我今尽皆正道廻向

除生死苦至菩提

〔裏〕

種子

勢州 願主 住譽良禪

高竹山明光密寺第十三世

伝燈大阿闍梨權大僧都法印賢貞建立之

〔写真 50〕

(正) 種子 (大日如来座像)

(右) 文久二壬戌歲

十一月吉日

開眼導師

法印寬淳

(左) 天下泰平

光明真言百万遍供養塔

国土安全

(台 座)

(正)

講中

(左)

武州

入間郡

南入曾村

〔写真 51〕

(正) (如意輪觀音半跏趺座像)

(正) 石経塔

(座) (右) 田中村

(台) (左) 安永二癸巳天

三月吉日

〔写真 52〕

奉造立地藏菩薩以念仏講是建二世祈者也

(正) (地藏菩薩立像)

寛文十三年癸丑八月吉祥日敬白講人数十二人

(台 座)

(正) 下奥留村

〔写真 53〕

奉造立為念仏供養二世安樂

〔正〕種子（地藏菩薩立像）

元祿四辛未天十一月□武州高麗郡柏原村同行四拾五人

〔写真 54〕

(正) (地藏菩薩立像)

(台 座)

享保四己亥年

奉造立

(正) 念仏供養

三月吉日

笹井村

此像刻石光孝
 蘇子侯取高麗帶印則本宮高麗山
 蘇家因平曾以世世流大菩薩一神
 世傳入道大香門善民世代念山
 地中取元中取頭六香日蘇善文人
 山 川 蘇

(正) (地藏菩薩半跏趺座像)

(台 座)

(正) 念仏供養

(右) 施主惣村中別而六齋日講善女人
世話人彦左衛門善男助力念仏
造於□年積以劫地藏大菩薩一躰
建于武州高麗郡柏原本宿高麗山
地藏院円光寺

法印隆抉謹敬白

(左) 地藏菩薩以大慈悲

若聞名号不墮黑闇
乃至法界平等普利
寬延二己巳林鐘日

(裏) 願以此功德

普及於一切
我等与衆生
皆求成仏道

寒念仏供養本願法印権大僧都隆宗和尚

(正) 種子 (地藏菩薩立像)

宝永七庚寅年十二月吉辰日

(台 座)

(正) 右 志んか志みち

左 川こいみち

従是

南 まちや

西 いるま川

(右) 廻行

岩沢□右衛門

ほか一二名

〔写真 57〕

享保十二丁未年 堀兼村施主

〔正〕種子 奉造立念仏式億万遍供養塔

二月吉日

惣人数百十一人

享保十二丁未年二月吉日
種子 奉造立念仏式億万遍供養塔
惣人数百十一人

(祖 合)

(注) 願行

岩元口古蹟門

利永一二番

西 乃 志 川

南 まさ中

鈴 具

式 川 乃 志 川

(正) 種子 奉造立念仏式億万遍供養塔

享保十二丁未年

〔写真 58〕

奉造立聖觀音為念仏講人數十四人二世安樂建者也

(正) (聖觀音立像)

延宝元年癸丑十一月吉日 下奥留村施主敬白者也

(式) 享保三十九年十月十日

言高更樂主施主

(寺) 菅原精進土古堂

若山門尖

奉造大乘經典六十六卷并卷函

(五)

回國行脚

〔写真 59〕

〔写真 59〕

〔正〕

回国行脚

奉納大乘妙典六十六部供養所

往山円実

〔右〕 營為說無上法宝塔

信為度衆生故供養

〔左〕 享保三戊戌十月日

下奥富村

〔五〕

〔樂野音〕

奉納大乘妙典六十六部供養所

〔写真 59〕

〔写真 60〕

〔正〕 天下泰平

種子 奉納大乘妙典日本廻国供粮塔

日月清明

〔右〕 皆寛政十戊午年二月吉祥日

三日 供養師金剛院法印寛晃

〔左〕 武州入間郡水野村願主

行者了全

〔五〕 西園

〔三〕 真治

〔写真61〕

(正) 西国

種子 坂東 百番巡礼供養塔

秩父

(右) 寛政九丁巳歳

三月吉祥日

(左) 供養導師

御嶽山金剛院現住

法印寛晃

〔写真 62〕

(正) 百番觀世音供養塔

天下泰平

(右) 羽黒山 富士嶽神社

月山 立山神社

湯殿山 黄金神社

(左) 陸前国松島

日本三景 安芸国宮島

丹後国天橋立

(裏) 明治二十六年癸巳九月

願主 諸口彦八建

(五) 于時六十有二

嗣子

諸口実太郎

(正)

諸口氏

(座) 台(左) 福原村

石工

浅見代次朗

〔写真 63〕

(正) 寛政五癸丑年 武州入間郡下奥留村中

種子 南無阿弥陀仏

六月吉祥日

願主寛善

(右) はんのふ

右 子ノごんげん みち

(左) 左 大山道

〔写真 64〕

(正)

右 大田ヶ谷

(馬頭観音座像)

左 坂戸道

(右)

増茂小右衛門

(左)

寛政八丙辰正月吉日

〔写真 63〕

西 青銅

(寫)

正 大田ヶ谷 正月吉日立

馬頭観音座像

坂戸道

龍王

(通合)

(式)

天保式丙辰正月十日

龍王

(寸)

天保十四丙辰正月十六日

東 増茂小右衛門

増茂小右衛門

(五)

龍王

増茂小右衛門

(正)

種子

秀音童子

妙薰禪定尼

東 新かし川ごへ道

(右) 天保十四卯七月十六日

扇町屋ミチ

(座) 天保九戌五月十七日

施主

宮岡伊左衛門

南 ミかじま道

(裏) 弘化三丙午二月吉祥日立

西 青梅

みたけ道

(正) (地藏菩薩立像)

〔写真 66〕

(正) 大六天

雪城沢俊郷書

(裏) 安政六己未歲九月建之

(台 座)

(正)

恵花

組中

市川仁兵衛

長谷川六之丞

